CASEER

2024 年度　シンポジウム報告書

主体的・探究的な学びの多様性とは

―東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方―

日時　2025 年 2 月 9 日（日）13:00～16:00

場所　東京大学赤門総合研究棟 A200
および Zoom でのハイブリッド開催

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

シンポジウム

主体的・探究的な学びの多様性とは

―東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方―

報　告　書

2025 年 2 月 9 日

於　東京大学赤門総合研究棟 A200

および Zoom によるオンライン開催

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

目次

シンポジウム：主体的・探究的な学びの多様性とは

―東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方―

開会 ..... 本田 由紀　2
開会の挨拶 ..... 勝野 正章・小国 喜弘　3

第Ⅰ部　主体的・探究的な学びとは

「両校の学びの独自性と共通性を探る」 ..... 淺川 俊彦・宇都宮 和音　5
「東大附属における学び」 ..... 南澤 武蔵・石川 いち華・島貫 温輝　14
「自由の森学園における学び」 ..... 内田 一樹・嶋岡 鼓太郎・江利 はるり　24

第Ⅱ部　主体的・探究的な学びの多様性を探る

コメンテーター：小玉 重夫・藤江 康彦・菅間 正道　ファシリテーター：本田 由紀 33
コメンテーターとのディスカッション 38
質疑応答 45

閉会の挨拶 49

シンポジウム「主体的・探究的な学びの多様性とは
―東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方―」

2025 年 2 月 9 日（日）13:00～16:00

会場：東京大学赤門総合研究棟 A200（ハイブリッド開催）

開会

本田　由紀（CASEER センター長・教育学研究科教授）

この公開シンポジウムは、学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）が主催しています。私は今年度、CASEER のセンター長を務めております東京大学大学院教育学研究科教授の本田由紀と申します。今日の総合的な進行を担当しますので、よろしくお願いします。

CASEER はこれまで毎年、公開シンポジウムを開催してまいりました。CASEER では東京大学附属中等教育学校との連携の下、附属中等教育学校の全生徒に毎年調査を行い、1 年ごとに変化を追うパネル調査を長年実施してきたわけですけれども、これまでの公開シンポジウムではその検証結果や東大附属での学びの実態についてご報告いただいています。CASEER としては、東大附属についてデータを蓄積してまいりまして、いろいろな検証結果も発表できているのですが、やはり一つの学校だけのことをじっくり検証するだけではなく、他の学校と照らし合わせて検証することによって特徴がはっきり見えてくるのではないかとずっと考えていました。

そして今年度、ようやくというか、いよいよというか、自由の森学園のご協力を得ることができ、密接な両校の連携の下、これからさまざまな調査を行ってデータを収集させていただき、両校の特徴や良さをそれぞれ浮かび上がらせるような共同研究・比較研究が実施できることになりました。そういう新しいフェーズに立ち至ったことを記念するシンポジウムが今日の場となっております。

そもそも今日はハイブリッドで開催し、会場には満席に近い形で聴衆の方々に来ていただけているわけですけれども、こうした対面とオンラインを併用で行うのもコロナ禍が始まって以来 4～5 年ぶりのことです。さらに、このように二つの学校が一緒にお互いの良いところを知り合う、学び合うことによって探究学習を考え直していこうという初めての試みができた点でも非常にわくわくする場になっております。どうぞ皆さまよろしくお願いいたします。

今日は二つの学校の対話のような場ですけれども、それぞれの校名が一定の長さを持っていますので、自由の森学園は「自森」、東大附属中等教育学校は「東附」という略称を使わせていただきます。

開会の挨拶

勝野　正章（教育学部長・教育学研究科研究科長）

皆さん、こんにちは。本日は日曜日の午後という、本来であれば休息のお時間にもかかわらず、本シンポジウムに対面、オンラインで多数ご参加いただき、誠にありがとうございます。

CASEER では、東附における主体的・探究的な学びが在学時だけでなく学校を卒業してから大学に進学したり仕事をしたりする中でどのような意義を持っているのか、生かされているのかということを明らかにすることを目的とし、2016 年度に在校生・卒業生パネル調査を始めました。このシンポジウムはその調査結果の報告を大きな目的として 2017 年度から毎年開催されています。

今回のシンポジウムがこれまでと大きく異なるのは、自森との共催で行われるシンポジウムだということです。自森と本教育学研究科との間では 2017 年に教育・研究交流協定を結んでおり、これまでは主に教育実習やインターンシップ（学校体験活動）を中心に協働を進めてきましたが、今年度からは CASEER の効果検証にも本格的にご参加いただき、協働が始まりました。

私自身の専門性は少し異なっていて、能力もないので、学びの分析や意義の研究には力が全く及びませんけれども、東附と自森の学校の文化や肌触りのようなもの、あるいは生徒たちの気質みたいなものを見ていると、もちろん似ているところもあるのですが、かなり大きく異なるところがあるという印象を個人的に持っています。その背景には、一人一人がそれぞれ持っているものがあるのでしょうけれども、それに加えて二つの学校における学びの違いもあるのだろうと思っています。もちろん主体的・探究的な学びという点では東附と自森に大きく共通するところがあると思いますが、その上でも二つの学校には違いがあるだろうと考えています。

主体的・探究的な学びというものが、学習指導要領に定められていることもあって、かなり全国的にどの学校でも推進しなければいけないような状況になっていますが、ともすると画一的になったり、規格化されてしまったりする傾向があると思っています。

このシンポジウムではこれまで、東附の学びを紹介したり、皆さんと理解を深め合ったりしてきましたが、こうした学びは非常に意義があるけれども主体的・探究的な学びは東附でしかできないものなのではないかという声が聞かれたことがありました。そういう中で今回、2 校の対話を通じて、まさに今回のシンポジウムのタイトルにあるような主体的・探究的な学びの多様性を探ることはとても大きな意義があると思っています。

私自身わくわくしているところですけれども、このシンポジウムでは、2 校の生徒や先生方、関係者の皆さんの対話に加えて、教育に関心があり、主体的・探究的な学びに関心のある参加者の皆さまにもぜひ対話に参加していただき、皆さまそれぞれにとって実りある時間にしていただければと思っています。

開会の挨拶

小国　喜弘（東大附属学校校長・教育学研究科教授）

今日は、ご参加いただきありがとうございます。東附と自森の 2 校で企画するというと、なぜこの 2 校なのかという感じが一見するのですが、意外と似通った精神で運営されてきた学校という気もするのです。

というのは、東附は戦後改革の中でエリート校にならず、民主主義教育を支えるような実験校になるのだという理念の下に成立しました。自森は 1985 年、全国的に管理教育によってすさまじい問題がさまざまに起きている中、戦後教育の理念に立ち戻って、平等であったり、民主主義であったり、権利であったり、真理の探究といったものを追求するような学校をつくろうということで創立されました。そういう意味で、東附と自森は人が人らしく生きること、

人らしく育つこととはどういうことなのかということを正面から追究してきた 2 校なのだろうと思っています。

今は探究学習が非常にはやりになっています。生成 AI が登場し、人間に残された労働能力は何なのかというと、探究的精神ではないかという話になっていて、探究的精神は大学入試でも使われるということで、いろいろな形で新しい学力商品のようになっているところがあるかと思います。そういうことをやりたい学校ではないというもう一つの共通性が改めて浮かび上がっていると思います。

その意味で、今日皆さんと一緒に私自身も学びたいと思っているのは、さまざまな公立学校の問題が指摘されている中、本当に学校教育システムは行き詰ったのかということを考えたときに、まだまだやれることはたくさんあるのではないか、そのときにわれわれは人が人らしく生きて育っていくためにどんな学びが必要なのかという、ある意味古くて新しい問題だと思いますけれども、原点に立ち戻って考えたときに、さまざまな可能性があるということに具体的に気付き学べる時間になればと思っています。

これが東附だから、自森だからできるものではなく、人間として生き育つからこそ全ての学校教育においてやらなくてはならない問題がここにあるのだということで、この会が運営されていると思っています。そんな意味で、ぜひ皆さんと一緒にこれからの学びの時間を過ごしていきたいと思います。

第Ⅰ部　主体的・探究的な学びとは

「両校の学びの独自性と共通性を探る」

淺川　俊彦（CASEER 特任教授）

宇都宮　和音（自由の森学園中学校・高等学校教諭）

（淺川）　宇都宮・淺川両名とも両校の勤務経験を持つということでの報告ですが、二人とも体育科なので他の教科のことはあくまでも傍らでみていての印象であり、今日のご報告は両校とも管理職の検閲を受けていないので全く勝手な報告になりますが、よろしくお願いします。

1. 両校の概要

両校のことを交互に話すので、途中でごちゃ混ぜにならないように、グリーンの背景のときは自森のこと、オレンジの背景のときは東附のことを話しているとご理解いただければと思います。

東附は、先ほどご紹介いただいたように戦後民主教育をどうつくっていくのかということを理念に出発しました。「未来にひらく自己の確立」を教育目標に掲げ、ここ 10 年ほどは探究的・協働的な学びを通して豊かな市民性を育むことを旗印にしています（Slide 1）。先ほど学校案内パンフを見たら、今年度はなぜか「豊かな人間性を育む」と少しぼやけた言い方になっているのですが、グラデュエーションポリシー（注）にあるように、民主的な社会を形成していく市民という結構はっきりとした方向性を打ち出しています。

（注）グラデュエーション・ポリシー

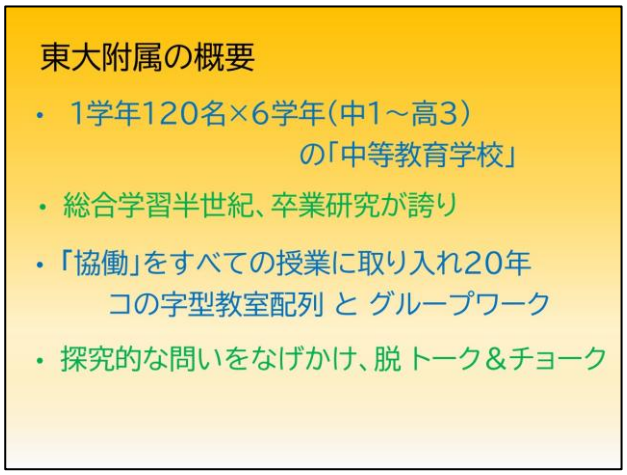
・自己との対話・多様な他者との対話を通して多岐に亘る事象に関心を深め、筋道を立ててその本質を問い続けることができる。

・主権者、社会の形成者として未来のために行動することができる。

Slide 1

（宇都宮）　一方、自森は 1985 年に創立され、今年 40 周年を迎えました（Slide 2）。人間の自立と自由への意志を育み、深い知性、高い表現、等身大の体験を追究しながら、ものの見方・考え方、いろいろな世界との関わり方である「観」の教育を行うことを教育理念に創立された学校です。

Slide 2



Slide 3

1-1. 東附の概要

（淺川） 東附は中等教育学校であり、入学時の 120 人がほぼそのまま高校 3 年生まで共に学びます（Slide 3）。総合学習は 1966 年に最初のカリキュラムが立ち上がっているので、60 年近い歴史があります。1980 年代には、卒業研究も含めた 6 カ年一貫の総合学習のカリキュラムを確立しています。2005 年からは教科学習を見直していくということで、毎回の授業の中にグループワークを取り入れ、コの字型の教室配列をデフォルトにしています。それまで個々の教員の努力はあったものの、大勢としては黒板の前で教師が話し、板書したものを生徒が受け取るという、一方通行の知識伝達であり、そうしたトーク＆チョークから脱して探究的な問いを協働で追求していくのだというふうに取り組み始めて 20 年になります。

ちょっと分かりにくいですが、Slide 4 の写真はコの字型になっています。真ん中に大きな空間があるわけではないのですが、生徒が向かい合って、話している生徒の方を見たり、黒板に書いてあることをと見比べてどうなのだろうと考えたりしている姿です。「4 人組を作って」と言うと、子どもたちはここから数秒の間にレイアウトを変えて、4 人での作業や話し合いに移り、またクラス全体に戻るという形、これを毎授業ほぼ全ての教科で行っていますので、授業のシステム・学びの作法として出来上がっています。

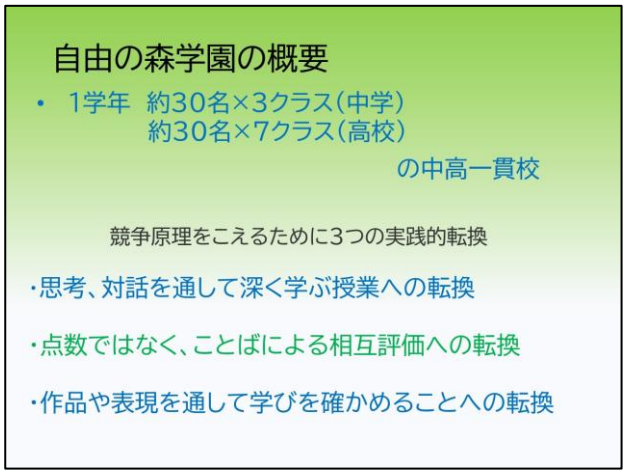
Slide 4

ICT ももちろん入れていますけれども、昨今いわれている個別最適化のツールではなく、協働を引き出すためのものとして、からだ丸ごとで関わり合いながら、ICT も使って世界とつながっていくということを志向しています（Slide 5）。

Slide 5

1-2. 自森の概要

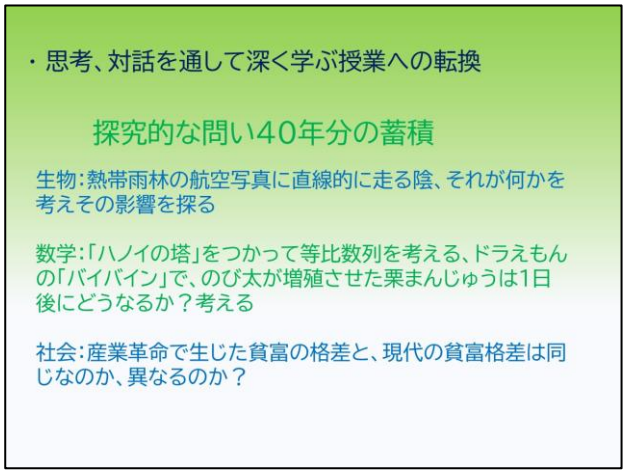
（宇都宮）　自森は、中学校が約 30 人×3 クラス、高校が約 30 人×7 クラスで編成されている中高一貫校で、生徒数は 900 名を超えます（Slide 6）。開校してからは、競争原理に頼らない本来の学びの実現のために三つの教育活動の転換を行ってきました。



Slide 6

一つ目に、事業とカリキュラムの改革です。詰め込み型から思考や対話を通した授業への転換を行いました。二つ目に、評価方法です。点数によって序列化するのではなく、自己評価表によって一人ひとりの生徒の振り返りに対して授業担当者が文章記述で返すような方法を取っています。三つ目に、授業の目標をテストではなく、レポートも含めた作品や表現を発表することに転換しました。

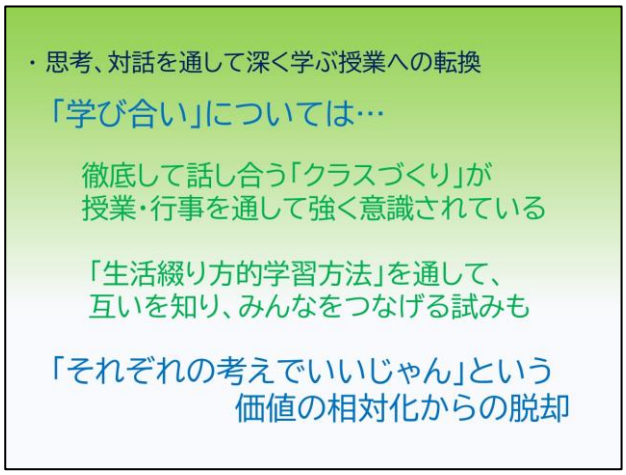
実際に扱われている問いを幾つか紹介したいと思います（Slide 7）。



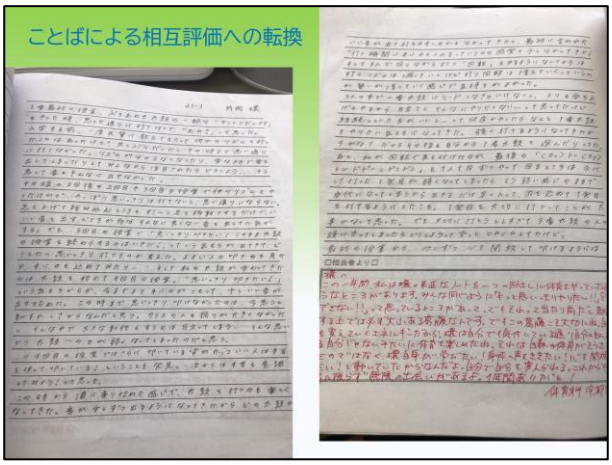
Slide 7

例えば生物では、熱帯雨林の航空写真に直線的に走る陰が何なのかという問いをもとに、生徒の中で思考を重ねたり、対話の中でプランテーション・モノカルチャーについての探究的な活動につなげています。数学であれば、「ハノイの塔」を使って等比数列を考えさせたり、ドラえもんのひみつ道具「バイバイン」で、のび太が増殖させた栗まんじゅうは 1 日後にどうなるのかということから指数関数を考えたり、社会科では産業革命で生じた貧困の格差と現代の貧富の格差は同じなのか、はたまた違うのかという問いから生徒同士で思考していきます。具体的にはこういった問いを授業の中で扱っています。

対話を通じた学び合いについてはまず根底に、クラスで何かあったときにはとことん話し合い、対話を通じて課題を乗り越えていく文化が校内にあります。それによってクラスの行事や企画はもちろんですが、例えば授業がうまくつくれていないとか、心地よく空間を感じていないといった課題に関してもクラスで徹底的に話し合い、どうしていくかということの習慣化をベースに、その上に授業があるような気がします（Slide 8）。



Slide 8

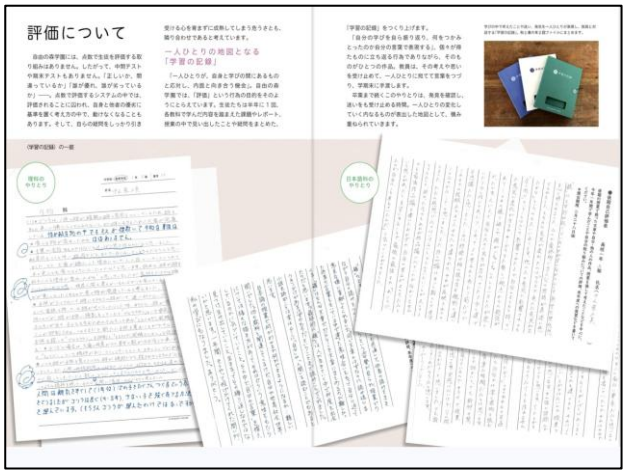


Slide 9

中には、幾つかのクラスの学級活動の中で互いの書いたものを読み合う「生活綴り方」的な方法で、声の伝え合い、聞き合い、応答のし合いが行われ、そうしたことも一人一人をつなげる試みになっているのではないかと思います。例えば、授業中にスマホを見ている人が多いといったことでも、それぞれが選び取っているなら仕方がないといった価値の相対化のようなことから、それでも空間をつくっていくなら授業中はやめた方がいいとか、そこから脱却して乗り越えていくようなことも時にはあります。

ことばによる相互評価への転換は具体的には通称「評価表」という「学習の記録」を使って行っています。Slide9 は実際に私が授業を持っていた中学 1 年の体育の「評価表」ですが、ぱっと量が多いですけれども、生徒が書いてきたものに対して教員が手書きで個別に返答しており、30 人いれば 30 人読んで 30 人分の回答をすることになります。

Slide 10 のように各教科でそれぞれの評価の仕方が言葉によってなされています。



Slide 10

こうしたものが全教科分集まって「学習の記録」ができあがります。(Slide 11)。

Slide 11

ことばによるものだけでなく、発表や作品、表現によっても学びの成果を確かめています（Slide 12）。

Slide 12

Slide 13 は木工の椅子や染織のタペストリーですけれども、1 年かけて作品を作っていきます。1 年で終わらず年をまたぐことも多々ありますが、一つの作品と時間をかけ徹底して向き合うことによって、実は他ならぬ自分自身と向き合いながら表現し、学びを深めていくということが取り組みとしてなされています。

Slide 13

Slide 14 は染織です。4 月にスタートし羊毛を洗い始めてから染めるまでに夏までかかり、11 月の末でまだ写真のようにほぐしたり、ようやくスピンドルでの縒りにはいったりしています。今年度はなんとか経糸まで、年度を跨いで横糸を紡いで、織りの段階にすすむことになります。何千年も営まれてきた手仕事の丁寧な世界を、大切に受け止めていきます。

Slide 14

Slide 15 は椅子作りです。丸太を大鋸でひいて切り出し、自然木と合わせてスツールを組もうとしています。この後も組んでは外しまた掘り進め、バランスや座り心地、強度を少しずつ調整していきます。

Slide 15

高 1 絵画では自分の眼を 1 年かけて描くのですが、単に対象を見つめているだけではなく、描きながら感じた思いは日によっても変わりますし、そうしたことと向き合いながら描いていきます（Slide 16）。何より向き合うことにとにかく時間をかけることが美術では大事にされているように思います。

Slide 16

それから、他者と響き合い、心身を解放する文化の一つとして欠かせないのが合唱です（Slide 17）。自森における合唱は学校文化として大切にされていて、それは授業や音楽祭にとどまらず、例えば学園祭や体育祭、公開研究会など、合唱とは一見関係なさそうな行事もみんなで歌って終わりたいですし、入学式では新入生に歓迎の気持ちを込めて在校生がひな壇に上がり歌う、卒業式でも最後は歌いながら涙ながらに自森との別れをする、という合唱の文化があります。そうしたものが関係性を育て心身を開放していると考えています。

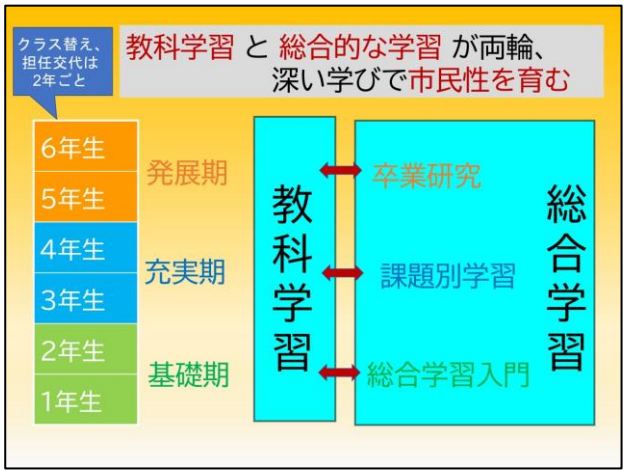
Slide 17

2. 両校のカリキュラムの特徴

（淺川）　自森はとにかく時間のかけ方が他校とは圧倒的に違うということです。その中で自分ととことん向き合うことと、そのことを通して他者と響き合うことが、表現・芸術による教育として貫かれているのには本当に感動します。

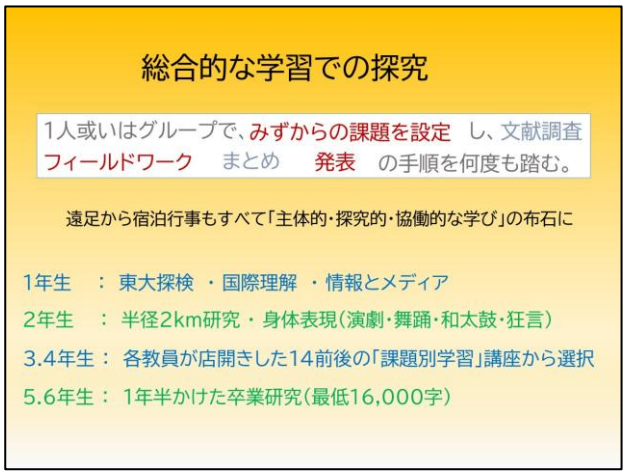
2-1. 東附の特徴

東附では 2･2･2 制といって、2 年ごとにクラス替え、担任替えがあります（Slide 18）。そして、それぞれに対応するように教科学習との 2 本柱で総合学習入門、課題別学習、卒業研究が位置付けられていて、自分たちの学びが「教科学習」と「総合学習」の 2 本柱であることは生徒もかなり自覚的に捉えています。



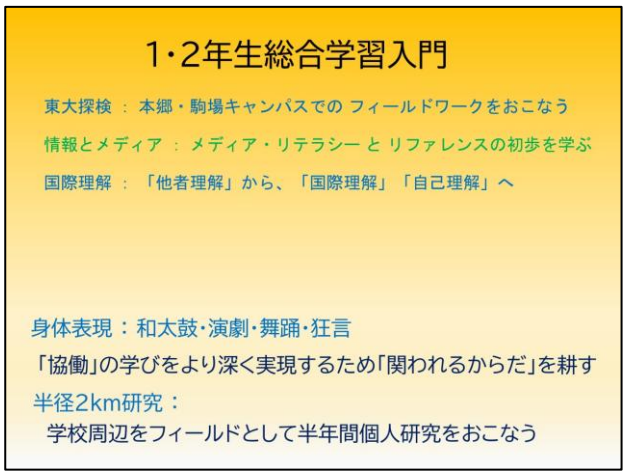
Slide 18

総合的な学習の中では、まず「課題を設定」する、テーマを決めるところから、そのテーマについて今までどんなことが明らかになっているのか、何が問題になっているのかという「文献調査」を行い、実験やインタビュー、アンケートなどを含めた広い意味でのフィールドワークをします（Slide 19）。そうしたものを通して何が明らかになったのかをまとめてプレゼンしていきます。これを中 1 から高 3 までそれぞれの発達段階に応じて繰り返し何度も行うという流れになっています。



Slide 19

1 年生では東大探検、情報とメディア、国際理解、2 年生では半年かけて身体表現に取り組みます(Slide 20)。表現は自森にはとても及びませんけれども、体が響き合うことが協働の学びの基礎になっていくという意識で取り組んでいます。そして半径 2km 研究ということで、エリア限定の個人テーマに半年間取り組むということを 2 年生で既に行い、4 年生でまた新たに自分の卒業研究のテーマを探すことになります。

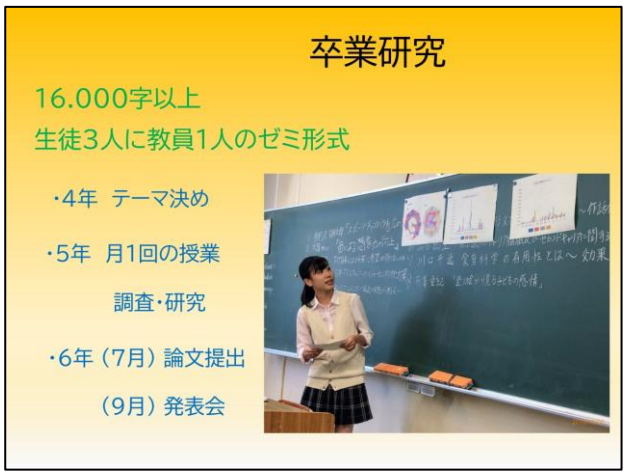


Slide 20

3・4 年生（中 3 と高 1 に相当）では、教員が「この指止まれ」方式で開設した 12～15 の講座を縦割りで学びます（Slide 21）。

Slide 21

卒業研究は最低 1 万 6000 字で、4 年生は教員のところを何人も回ってテーマを決め、月 1 回のゼミを通して 6 年生の 7 月に論文を提出します（Slide 22）。9 月に発表、最終的なまとめは 10 月までかかるので、かつては「こんなことを高 3 の秋までやらせて受験はどうなるのか」と言う保護者がいないわけではなかったのですが、こうした取り組みが大学以降の学びや仕事に大いに生きていることが分かってきています。

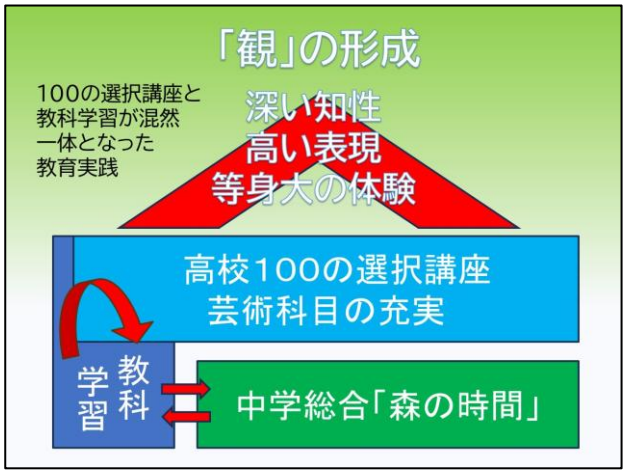


Slide 22

2-2. 自森の特徴

（宇都宮） 一方、自森では、東附のような整えられたカリキュラムというよりも、必修の教科授業と重なりながら多様な選択授業の開講が一つの大きな特徴だと思います（Slide 23）。選択授業は全部で 100 近くあり、いわゆる総合学習というふうに別物では

なく、生徒の意識的にもほぼ必修の教科学習と同じような感覚で選択授業に向き合いながら学んでいると思います。



Slide 23

この中には教科選択科目に相当するものから東附の課題別学習のようなものまで様々あって、高校 1 年生だと最大 6 単位、高校 2 年生だと最大 8 単位、高校 3 年生では最大 12 単位、3 年間では卒業単位のおよそ 3 分の 1 が選択講座という生徒もいるという、選択肢の豊富さが大きな特徴だと思います（Slide 24）。

Slide 24

芸術科目は、選択必修の美術と必修の美術あわせて 10 単位あるうえに選択講座で十数単位が上積み可能なので、ここでの学びを踏まえて芸術系の進路にすすむ生徒も大勢います。同じように、小岩井生態学や林業を履修して卒業後は環境問題に関わっているとか、授業を選び取ること自体がひとつの「探究」の営みであると言えそうです。

Slide 25 はサンバです。歌や演奏だけでなくダンスの構成や衣装作りなど、まさに総合的な学びをおこなっています。浅草のサンバカーニバルでは、他チームと異なり数年でメンバーが入れ替わるにも関わらず、十数年に渡り上位の 1 部グループを維持してきました。

Slide 25

Slide 26 は小岩井生態学です。学校のある小岩井地区を中心に歩きながら里山の自然について学びます。時には西表島など亜熱帯のフィールドワークをおこなって比較したりします。

Slide 26

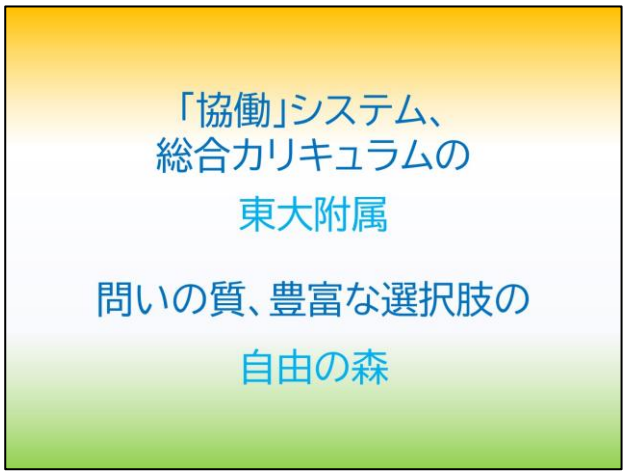
Slide 27 はカバディです。TV で紹介されていたのを観た生徒の「やってみたい」から始まって、いまでは卒業生から日本代表を数名輩出するまでになりました。

Slide 27

Slide 28 は林業です。

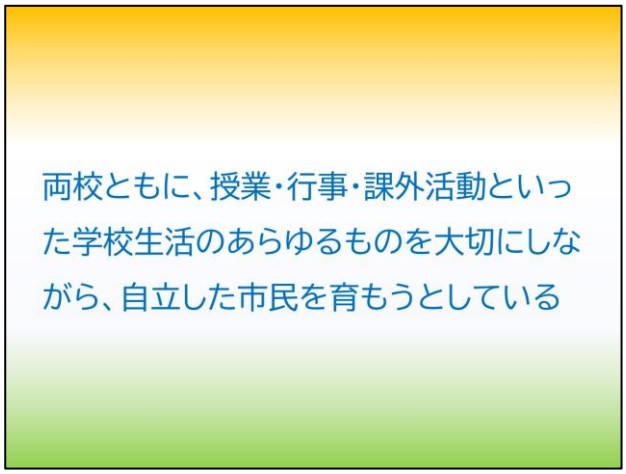
Slide 28

（淺川）　まとめると、全教科・総合学習に一貫した「協働の学習システム」と「総合カリキュラム」が東附の特徴であり、探究的な問いの質や豊富な「授業の選択肢」で勝負しているのが自森という大きなイメージができると思います（Slide 29）。



Slide 29

いずれの学校でも、授業だけでなく行事や課外活動といった学校生活のあらゆるものを大切にしながら、自立した市民を育もうとしているところは、同じ志を持った学校とまとめることができると考えています（Slide 30）。



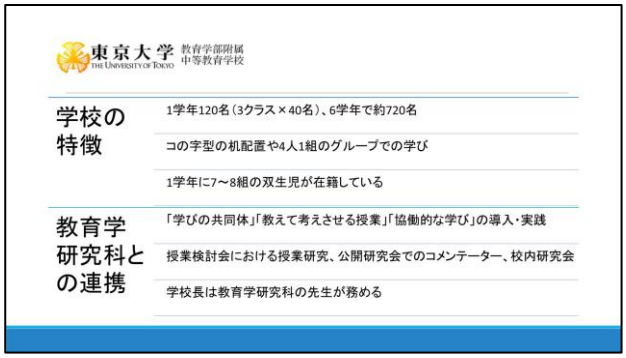
Slide 30

「東大附属における学び」

南澤　武蔵（東大附属学校教諭）
島貫　温輝（東大附属学校在校生）
石川　いち華（東大附属学校在校生）

（南澤）　本日は、私と石川さん、島貫さんの２人の生徒に来てもらって、東大附属でどのように生徒が学んでいるか、お話ししたいと思います。

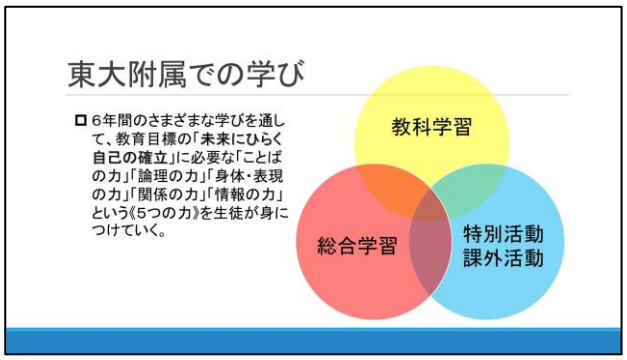
学校の特徴等は淺川先生からお話がありましたので十分かと思いますが、1 点加えるとすると本校は双子の教育の学校ですので、双子が各学年に平均 7～8 組いるのが特徴だと思います（Slide 1）。また教育学研究科に附属していますので、さまざまな形で研究科の先生方に助けていただいているという学校です。



Slide 1

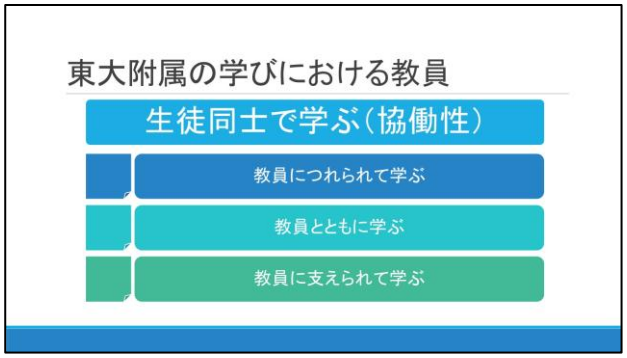
1. 東大附属での学び

東大附属の教育目標「未来にひらく自己の確立」は今も紹介があったと思います（Slide 2）。また、市民性、人間性も大切にしていますが、学校での学びとなると、教科学習だけ、総合学習だけ、またはそれらを別々にというふうに考えられているところがあるかもしれません。しかし、もちろん教科学習もありますし、総合学習も充実はしていると思いますが、それ以外に特別活動、課外活動も生徒の学校生活の中では非常に大切な部分ですし、それらが関連し合って生徒の学びをつくっていると考えています。もっと言えば、生徒は学校以外の場所でもさまざまな活動をしてさまざまな学びをしているので、何か一つだけで学んでいるというよりも、学校の中でさまざまな活動を通して学びを深めていると考えています。



Slide 2

これからお話ししていく際に、私は教員ですので教員の立場から先にお話しできればと思うのですが、協働性という観点で、本校では生徒同士で学ぶことが授業や他の場面でも基本になっていることをお伝えします（Slide 3）。



Slide 3

では、教員は何をしているのかというと、一つは教員が教材や学びになるものを準備して生徒に提供するということが挙げられると思います。これを「教員につれられて学ぶ」と表現してみました。それから、教員として授業を考える際に、毎年新しいことを私たち自身が学んでいる、場合によっては学び切れないまま生徒に出しつつ、生徒と一緒に学ぶこと

もあると思います。そういったものを「教員とともに学ぶ」と表現しました。主語はもちろん「生徒」になります。生徒が頑張って自分で学ぼうとしているものをわれわれが支える、応援するという形もあると思います。それを「教員に支えられて学ぶ」と表現しました。私の個人的な考えかもしれませんが、東附の教員はこういった形で生徒に関わっていると思います。

Slide 4 は、「教員につれられて学ぶ」授業の一場面です。これは 2 年生の通常の授業です。机がコの字型で、私が授業をしています。クルディスタンの人々が埼玉県の川口市や蕨市で増えているということを扱い、それはどこなのかというのを生徒が地図帳で探しています。

Slide 4

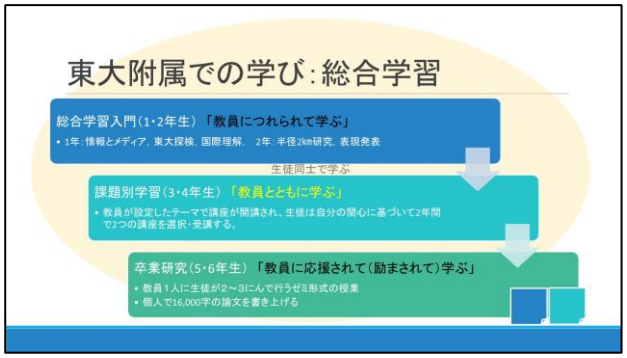
その前に実はパキスタンの話をしているので、生徒は国だと思って一生懸命探すのですが、地図帳を見ても国が出てきません。それを生徒が「国じゃないの？」などとやりとりしながら見つけていきます。すると地図帳には確かに国としては書かれていなくて、シリア、トルコ、イラン、イラクにまたがる地域として出てきます。なぜその地域から難民が入ってくるのかということで、最大の少数民族と呼ばれていることなどを私が話し、川口市や蕨市に多くのクルドの人たちが来ているのはなぜかという話を私の方で用意しながら、生徒が自分たちで学んでいきます。

Slide 5 の写真②は「教員とともに学ぶ」授業の一場面です。高校の世界史の授業で、ヨーロッパ近世の宮廷文化の話が出てきたのですが、ちょうどこの日はハロウィーンで、当時の宮廷では仮面舞踏会が行われていたことから、全員で仮面をかぶっているところです。この人数で仮面をかぶったらどんな感じになるのだろうという私の興味で生徒に仮面を用意し、「これをみんなで作ってかぶってみない？」という話をしたら、生徒たちはいそいそと切り始め、みんなで着けて記念撮影をしました。私の興味を生徒が受け入れて一緒にやってくれるところが本校の特徴だと私自身は感じています。

Slide 5

写真③は、授業教材として使えるものを後輩に作ろうということで、学んだものを生かしてゲームのようなものを作るようにリクエストし、生徒が自分たちで取り組んでいます。私のリクエストはそれだけなので、生徒が題材を決めてやっていくのですが、そうすると、これが欲しい、あれが欲しいと生徒が言ってくるので、私はそれを準備するだけという形です。

総合学習については先ほどもいろいろ話があったので細かくは話しませんが、卒業研究は「教員につれられて学ぶ」「教員とともに学ぶ」「教員に支えられて学ぶ」の全部が入っていると思っています（Slide 6）。



Slide 6

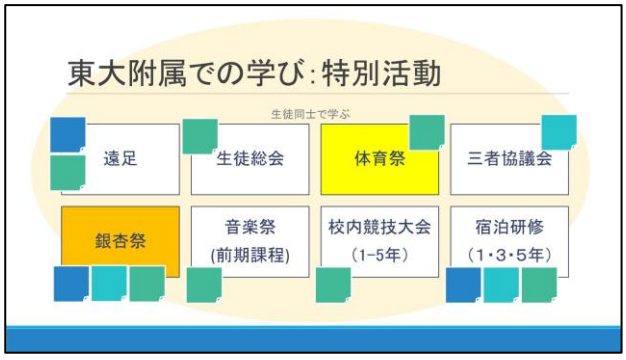
Slide 7 は、本校で昨日実施したイベントです。私

が課題別学習で「楕円球でつながる世界」というラグビーの講座を 1 年間やっていて、自分たちが体験したことを他の人に伝えることをゴールにしていたので、このイベントを行いました。企画も運営も全て生徒が行い、私がしたことは、日本代表の人に来てもらってラグビーの魅力を生徒に伝えてもらったこと、プロのトップリーグで実際に企画・運営している人に来てもらって生徒のプレゼンを聞いてもらったり、評価してもらったりしたことぐらいで、他は全部生徒がやります。

Slide 7

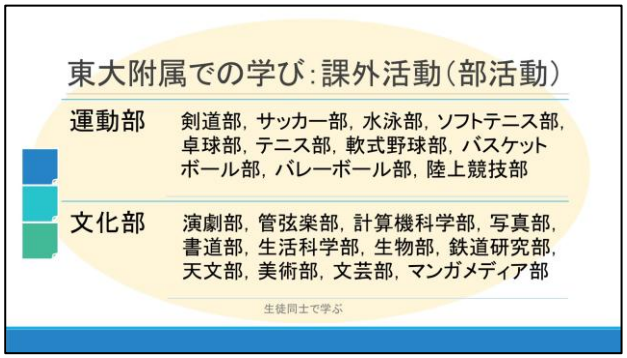
しかし、この講座で一番楽しい思いをしているのは私です。なかなか会えないプロの人や日本代表の人に会うことができますから、私が一番楽しんでいるのですが、生徒が一緒にやってくれているという意味では、教員が学んでいるものを生徒が一緒に学ぶということにつながっていると思っています。

特別活動に関しては生徒がこの後自分たちで話してくれると思いますが、ここにもさまざまな要素が入っています（Slide 8）。教員が主導することもありますし、一緒に成長することもありますし、陰から応援することもあります。



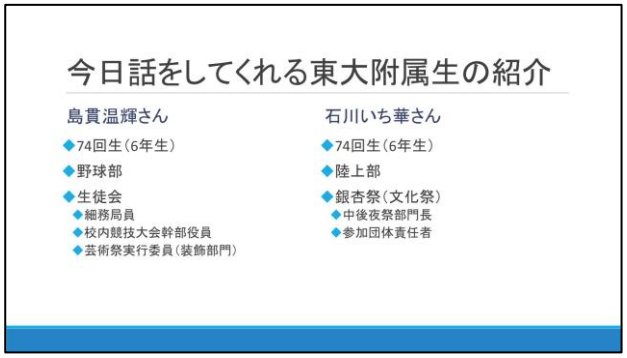
Slide 8

部活動は、少数の学校にしては多いといわれていますが、こちらも生徒が自主的に運営し、困ったときには教員が助けるという形です。全く関わらないわけではありませんが、生徒が主体となっています（Slide 9）。



Slide 9

生徒の言葉が皆さまの関心事だと思いますので、早速、島貫さんと石川さんの二人から話をしてもらおうと思います（Slide 10）。



Slide 10

2. 島貫さんの発表

（島貫）　東大附属 6 年の島貫温輝です。先ほど東附には双子が多いという話があったと思うのですが、実は僕も一卵性の双子で、結構仲がいい双子だと友達からは言われています。本日は、私が東大附属で

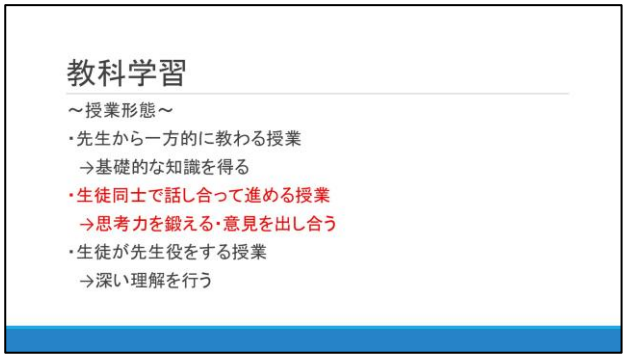
6 年間過ごした中で感じてきた自主的・探究的な学びについてお話ししたいと思います。

東大附属での学びは、先ほど南澤先生もおっしゃっていたように教科学習・特別活動・総合学習の 3 分野に大別して整理することができると考えました（Slide 11）。それぞれの分野での学習は他の分野と切り離せるものではなく、独立せずに互いに影響し合っていたと思います。

Slide 11

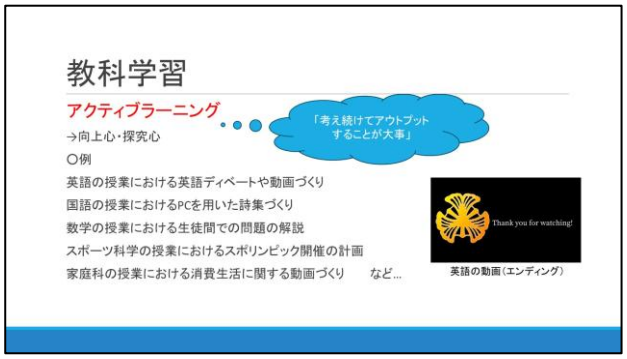
2-1. 教科学習について

まずは教科学習についてです（Slide 12）。授業形態は科目や時間によって異なるのですが、大きく分けると、先生から一方的に教わる授業、生徒同士で話し合って進める授業、生徒が先生役をする授業の三つを受けてきました。東大附属は、生徒同士で話し合って進める授業がどの科目にもあることが特徴的だと思います。グループになって進められる授業によって、意見を伝え合うことの重要性を私は何度も体感してきました。なぜなら、考えていることをみんなに伝えることで、その議論が進展したり、何らかの影響をもたらしたりすることが多かったからです。



Slide 12

東大附属の学びを特徴付けるものとして、アクティブラーニングがあると思います（Slide 13）。アクティブラーニングとは能動的に行う学習活動のことであり、私は自分でしっかり考え続けてアウトプットすることが大事だというメッセージを感じながら取り組んでいました。活動を通して能動的にさまざまなことを吸収していくことにより、向上心や探究心が育まれました。



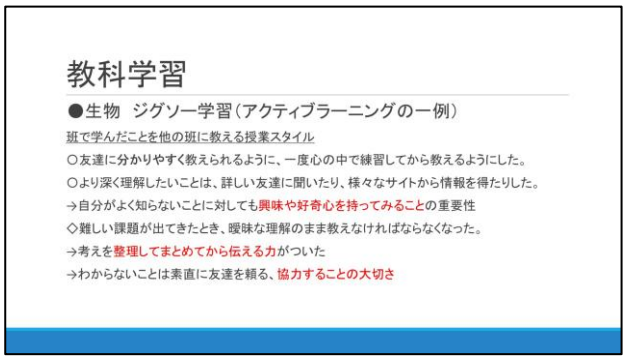
Slide 13

東大附属ではさまざまな授業でアクティブラーニングが取り入れられていますが、本校らしい事例を紹介すると、英語の授業では英語を使ったディベートやテーマに沿った動画の作成を行いました。動画の作成に関しては英語の先生から、東大附属にまつわるテーマにしなさいという指示以外に詳しい説明はあまりなく、動画の形式やテーマ、構成などは生徒が自由に決めました。私の班では、学校行事というテーマに沿って約 8 分の動画を作成しました。右下の写真は、実際に私が編集した動画のエンドロールです。私は、先生と生徒の間にある程度の信頼関係がないと、このような野放しの状況にはならないのではないかと思います。こうして野放しの状況で生徒たちが能動的に英語に触れることで、英語に対する興味を持たせられる授業になったと思います。

スポーツ科学の授業では、オリンピックならぬ「スポリンピック」と題し、バレーボールやサッカーなどで自分たちに適したルールを考え、生徒が運営しました。先生には道具の準備だけしてもらい、その他は生徒自身で行いました。どのようなルールにすれば生徒全員が楽しめるかをそれぞれが考え工夫することが、この授業の大事なポイントだったと思い

ます。

生物の授業では、ジグソー学習という授業スタイルが取られていました（Slide 14）。



Slide 14

左の図のように、班ごとに先生から与えられた課題を理解して、それを別の新しい班になって教えるという授業です（Slide 15）。

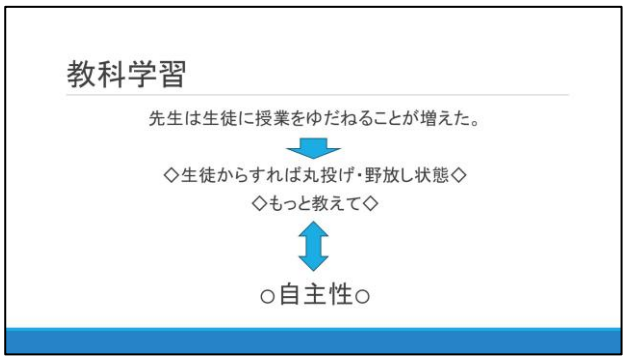
Slide 15

右側は、私の班が「DNA の損傷と修復について」という課題を与えられたときに作成した資料です。授業中、先生は宿題プリントの丸付けをしていたり、課題に関係のあるYouTube動画を探したりしていて、授業時間中はほとんど生徒に任せていたという印象があります。

私は友達に分かりやすく教えることを最も意識し、課題理解や情報集めに励んでいました。そのため、相手の立場になって考えること、興味や好奇心を持って見ることが重要であると感じました。それが結果的に豊かな学びにつながっていたのではないかと思います。

しかし、課題内容が難しく、なかなか理解できずに教える時間を迎えてしまったこともありました。そのときは、分かっていることと分かっていないことを整理して、考えをまとめてから話すことを意識し、分かっていないことは友達に聞くようにしていました。この経験からは、話をまとめる力や協力することの大切さが感じられました。これらの力は、東附における生徒会活動や他の学習時でも養われていたと思います。

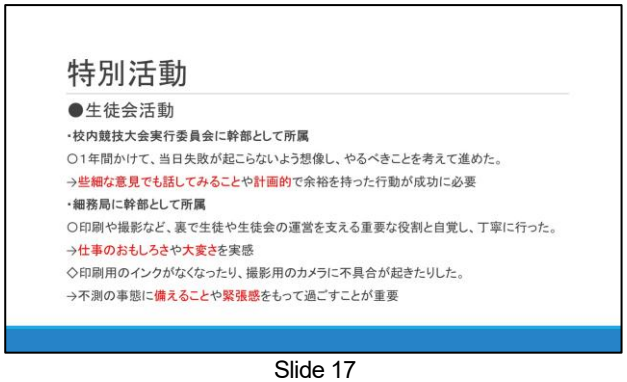
ここまでお話ししてきたように、学年が上がるにつれて先生が生徒に授業を委ねることが多くなっていたと感じます（Slide 16）。生徒からすれば、丸投げで野放しなのではないか、もっと教えてくれてもいいのではないかと思う場合があるかもしれません。しかし、この環境下で自分から調べたり勉強したりすることで自主性が伸びていたのではないかと今は感じます。先生から教わるだけでは収まらない、東附らしい学びだといえると思います。



Slide 16

3-2. 特別活動について

次に、特別活動についてです（Slide 17）。私は校内競技大会実行委員会に幹部として所属し、行事当日に失敗が起こらないよう、想像しながらやるべきことを進めました。



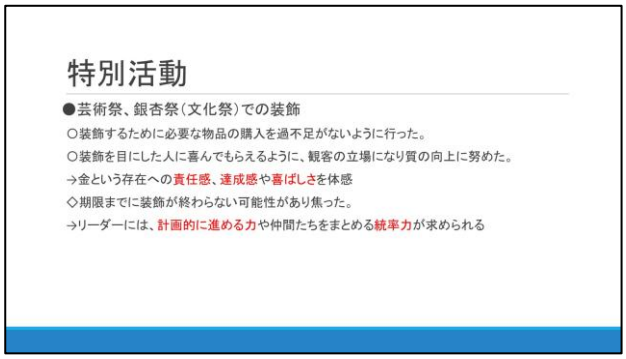
Slide 17

その際に、些細な意見でもミーティングで話してみることや計画を立てて余裕を持つことが重要だと

学びました。これらの姿勢は、普段の授業でのグループワークや定期テストの勉強計画などにつながっていたと感じます。

並行して細務局に幹部として所属しました。印刷や行事の撮影など裏で支えるのが主な業務でしたが、それは社会にとって重要な役割であると自覚し、丁寧に作業しました。大変だったことは、印刷用のインクがなくなってしまったり、カメラに不具合が起きたりしたことです。不測の事態に備えることや緊張感を持って過ごすことが重要であると学ぶとともに、仕事の面白さや大変さを実感しました。

芸術祭や文化祭での装飾も行いました（Slide 18）。



Slide 18

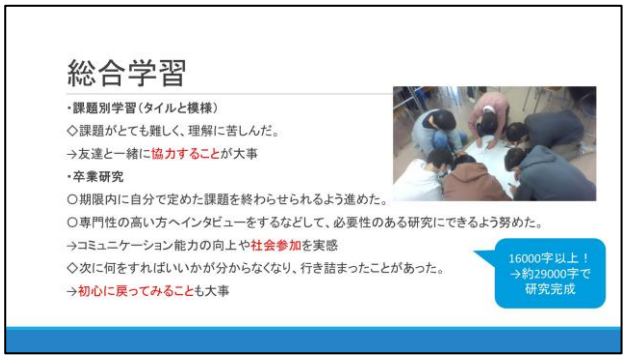
Slide 19 は、私の装飾チームが実際に作ったものです。左の絵はバンクシーの絵をまねて作ったもので、個人的にかなり気に入っています。右の写真の花のオブジェクトは、この年の文化祭のスローガンである「万彩」をイメージして作りました。

Slide 19

私は、それまで経験がなかった物品購入の会計作業や、装飾の質の向上に尽力しました。想像以上に装飾に時間がかかって苦労しましたが、装飾チーム全体に予定の共有をしたり、完成度をその都度装飾チームに伝えるなどして、統率していくことでやり遂げられました。計画力や統率力の必要性、お金に対する責任感や、装飾を作り上げられたときの達成感や喜ばしさを身をもって感じることができました。特別活動での経験は、教科学習や総合学習では味わえない、将来に確実に生かされるものだったと考えています。

3-3. 総合学習について

最後に、総合学習についてです（Slide 20）。私は 4 年生のときの課題別学習で、「タイルと模様」という講座を受講しました。



Slide 20

左の写真は、オランダのアーティストであるエッシャーという方の作品を参考にして、同じパーツを組み合わせて作った絵です（Slide 21）。真ん中の写真は、イギリスの物理学者ペンローズによるペンローズタイルというタイリングを友達と協力して手描きしたものです。

Slide 21

このように、本講座では数学的・芸術的に考え続ける必要があり、私にとって非常に難しい課題ばかりでしたが、友達と協力し助け合うことで困難を乗り越えてきました。大学や社会に出たときに遭遇する問題の解決法の一つを学ぶことができたと思いま

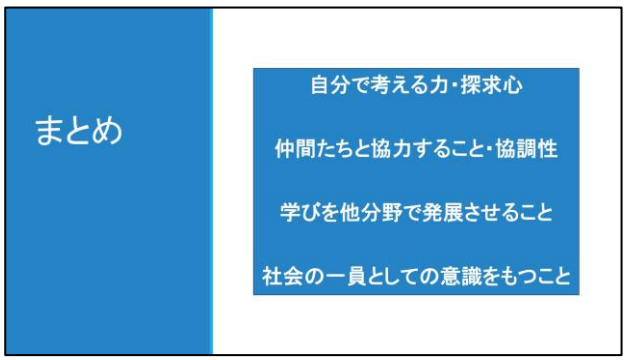
す。

卒業研究では、生徒それぞれが選んだ個性的なテーマに沿って、1 年半をかけて 1 万 6000 字以上を執筆します。こんなに壮大な分量を経験している高校生は少ないのではないでしょうか。私は「盲導犬と私たちがより共生しやすい社会とは」というテーマで研究を進め、約 2 万 9000 字の論文で研究を締めくくることができました。

生徒会活動等で培った計画力を発揮しつつ、インタビュー調査などを通して多くの人とコミュニケーションを取ることができました。この経験から、コミュニケーション能力が多少なりとも向上し、社会参加を実感することができました。しかし、研究の途中で次に何をすればいいか分からなくなってしまい、行き詰まったこともありました。そんなときは初心に戻って研究の着地点を改めて確認することで克服してきました。今後の生活でも、総合学習で培ってきた問題解決法を生かしていきたいと思います。

3-4. まとめ

これまで話してきたように、私は東大附属でいろいろな経験をさせてもらい、自分自身を成長させることができました（Slide 22）。東附の授業は、先ほどもお話ししたとおりグループになって活動することが多く、友達や先生とのコミュニケーションが取りやすい環境が整っていると思います。そのため、自分で考える力や探究心、仲間たちとの協調性は、生活のどんな場面でも発揮され、育まれていたと感じます。また、ある分野での学びを他の分野で発展させることは自分を確実に成長させ、実り多い学びをもたらす効果があるように思いました。



Slide 22

東大附属の環境は、社会の一員としての意識を持たせることができる環境だと思います。生徒主体の活動は、一つのコミュニティとして捉えられます。その中で主体的・探究的に学んでいくことで、将来必ず役に立つ力を生徒それぞれが育めるに違いないと感じました。

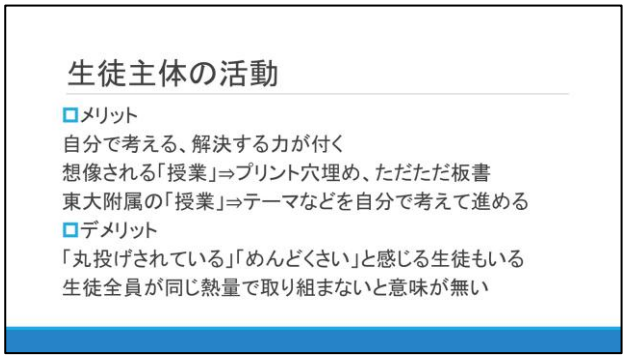
3. 石川さんの発表

（石川）　東大附属 6 年生の石川いち華です。本日は東附の学びで私が得られたことについて、生徒主体の活動を主軸に話していきたいと思います。

3-1. 生徒主体の活動の特徴

まず、私が考える生徒主体の活動のメリットは、自分で考える、解決する力がつくことだと思います（Slide 23）。通常想像される授業では、プリントを穴埋めするだけだったり、先生が前で話して生徒はただただ板書をするだけを想像する人も少なくないと思います。実際、東大附属でもそうした授業がないわけではありませんが、教科書に沿いながらもテーマや目的を自分たちで考えて活動することが非常に

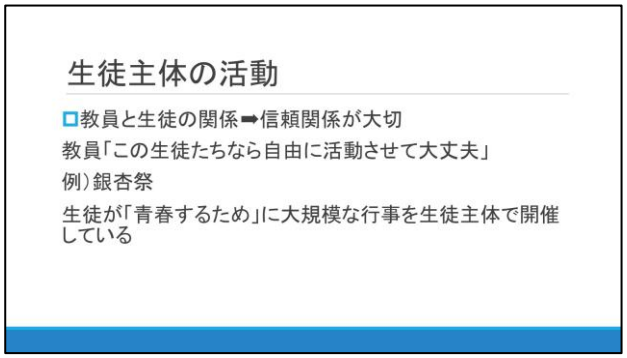
多いです。



Slide 23

私が考える生徒主体の活動のデメリットは、「丸投げされている」「面倒臭い」と感じる生徒もいることです。確かに、言われたことをただただやるよりも大変ですし、実際に自分も種類によっては面倒臭いと思ったりもします。しかし、そうやってグループ活動に参加してくれない人が一人でもいると士気が下がりますし、活動としてうまくいっていないように感じます。全員が同じ熱量で活動できるようにすることが今後の課題だと考えました。

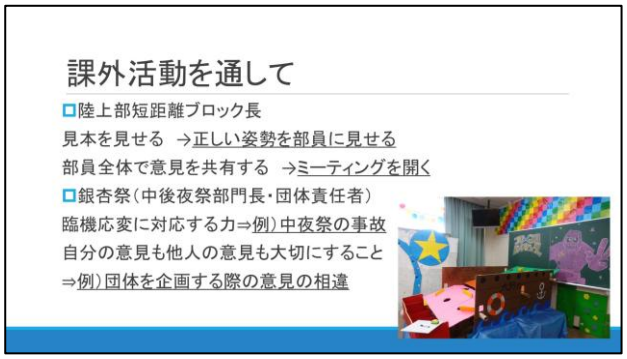
生徒主体の活動にはこのようなメリットとデメリットがあるのですが、そもそもこうした活動をするためには、教員からの信頼を獲得することが重要だと考えます（Slide 24）。教員がこの生徒たちなら自由に活動させて大丈夫と思ってくれているから、東附は生徒主体の活動が長く続いているのだろうと考えました。私は、先生たちが面倒臭いから生徒に丸投げしているのかなと勘違いしていたのですが、みんなそうではないということにあるとき気付きました。それはなぜかというと、ある先生に銀杏祭の準備期間中に呼び出され、「銀杏祭を開催している理由は、あなたたちに青春してほしいからです」と言われたからです。銀杏祭は全校生徒をはじめ外部のお客さんが何千人も参加する大規模な行事です。それを生徒が主体となって青春のために開催することは、教員と生徒の信頼関係がないとできないものだと思いました。



Slide 24

3-2. 課外活動を通して学んだこと

続いて、私が課外活動を通して学んだことをお話しします（Slide 25）。



Slide 25

最初に、5 年次に担当していた陸上競技部の短距離ブロック長についてお話しします。陸上部に顧問の先生はいらっしゃるのですが、基本的に大会へのエントリーや練習の運営は生徒が主体となって行っています。私はそこで、短距離ブロックを引っ張るリーダーとして活動していました。そのとき学んだことは、単にリーダーだからといって部員を従わせたり怒ったりするのではなく、私より上のリーダーについていく姿勢を見せたり、コーチの話を真剣に受け止めたりする見本を見せることが重要だということでした。そうすることで、どういった行動が部活に所属している上で正しい姿勢なのか、部員が自ら考えて動くことができると思います。

次に、部員全体で意見を共有することが重要だと感じました。自分の部活を楽しく成長できる場所にしたいのはみんな一緒なのに、それぞれ考え方が違うだけで仲間割れが起きることがあります。そこで私はミーティングを開き、部員の考えを知ることで

さらに良い部活にしようと試みました。「幹部がどんな思いで部を引っ張っているのかが分かった」と言ってくれた部員もいたので、生徒が自主的に部活を運営するためには生徒間の意見共有の場を設けることが非常に大切だと学びました。

次は、銀杏祭との関わりです。私は 5 年次に中後夜祭部門の部門長を、6 年次には団体の責任者を担いました。2 日間行われる銀杏祭では、本祭終了後に 1 日目は中夜祭、2 日目は後夜祭を行います。5 年生（高 2）の 4 月から活動を始め、9 月の本祭に向けて準備をしました。6 年生の団体では「VS 嵐」をオマージュした「VS 東附」を作り上げました。右下の写真にあるのは装飾の一部で、全てメンバーで一から考えました。

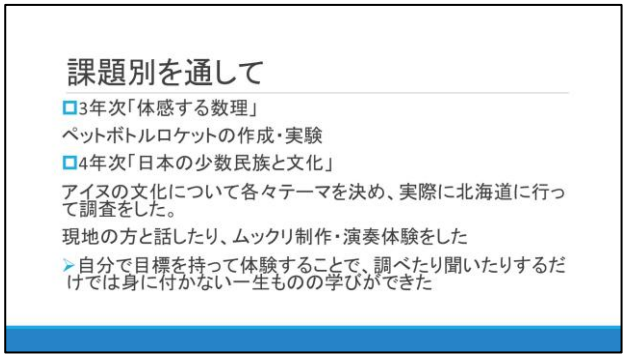
リーダーとして学んだことは、臨機応変に対応することの重要さです。銀杏祭は企画するのも、話し合うのも、指示するのも、みんな生徒同士です。ほとんど全て生徒で制作しているのですが、私たちはミスをしまくります。ミスをすること自体は問題ないのですが、今まで自分が計画してきたものが全て駄目になってしまうことが多々あります。それがとてもつらかったです。

例えば、中夜祭では照明器具を夏休みの間から準備していたのですが、本番で熱し過ぎて全ての照明が消えてしまいました。その後もまだ出し物があったので頭が真っ白になりましたが、急いでタイムテーブルを前後させたり、体育館の照明をつけるなどの対応をしました。部門メンバー的にはショッキングな失敗となってしまいましたが、観客のみんなからは「大したミスとは思わなかった」と言われたので安堵しました。自分が判断するしかないような状況でぱっと判断できる能力が身に付いたことは、課外活動を通して私が得たもので最も大きいと思います。

次に重要だと思うのは、自分の意見も他人の意見も大切にすることです。一見当たり前だと思うかもしれませんが、意外と難しいと私は思います。6 年次の団体で、どんな出し物にするかを友人数人と話し合っていた際、やりたいことにかなりのずれがありました。こういう場で議論が滞ったとき、大抵は誰かが折れて一つの意見になることが多いと思います。しかし私は今後何カ月も制作していく団体の全員が納得できる形にしたいと思い、全ての考えをごちゃ混ぜにした企画ができないか模索しました。その結果、「VS 嵐」にはないアトラクションを追加し、オリジナルの「VS 東附」が完成しました。自分の意見を押し殺すのも、他人の意見をつぶすのもやめて、全意見の中間を取ることがうまくなったのも東附での学び方が生かされていると感じました。

3-3. 課題別学習を通して学んだこと

次に、課題別学習についてです（Slide 26）。私は 3 年次に「体感する数理」という課題別学習で、ペットボトルロケットを作成し、実際に飛ばす実験をしました。作る方法をどう変えれば遠くに飛ばせるか、自分で考えるのが楽しかったです。



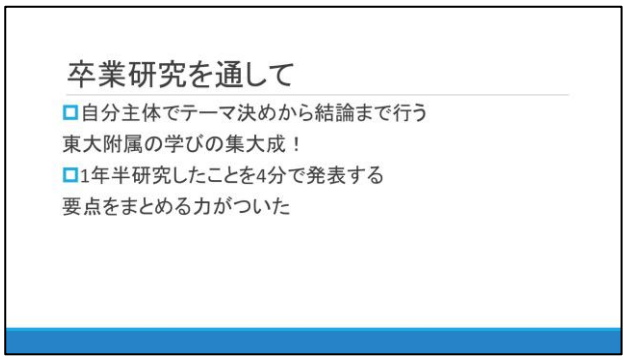
Slide 26

4 年次には「日本の少数民族と文化」という課題別学習で、アイヌ民族の文化について学び、実際に北海道を訪れて現地の方に話を聞いたり、ムックリという楽器を作って演奏する体験をしました。

どちらの学習でも、自分で目的を考えるという活動が重視されていたと思います。自分で目標を持って体験することで、調べたり聞いたりするだけでは身に付かない、一生ものの学びを得ることができたと思います。

卒業研究では、自分でテーマを決めて、途中の調査や研究も全て自分主体で行い、結論を出すことを頑張りました（Slide 27）。言われたとおりのことをす

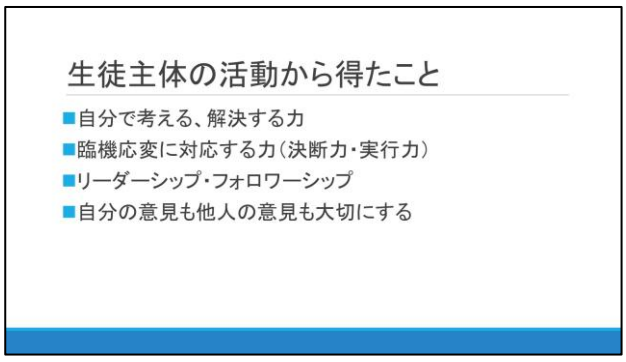
るのではなく、次に何をするのか、毎日毎日考えて実行することは簡単ではありませんでした。これぞ東附の学びの集大成という感じがしました。大変なことはたくさんありましたが、特に私は1年半という長い期間でどんな研究をしたのかを発表することが一番大変だったと感じました。結論までの過程を全て話す必要があるのに、時間があまりにも短かったからです。それによって、自分がやってきたことのどの部分が自分の結論に重要な影響をもたらしているのか、要点をまとめる力がついたと感じました。



Slide 27

3-4. まとめ

生徒主体の活動から、私が得られたことはたくさんあります（Slide 28）。



Slide 28

まずは、何度も述べているように自分で考える力、解決する力です。誰かに言われたとおりにするのではなく、自分の力でやり遂げることに意味があったと思います。

臨機応変に対応する力も手に入れました。小さなミスでも大きなミスでも慌てず、すぐに打開策を考えることが大切だと学びました。またその打開策をすぐに実行できる決断力と実行力も培われたと思います。

3回もリーダーを務めたので、リーダーシップは多分身に付いたと思いますが、さらにリーダーから見てありがたい行動をしてくれる人からは逆に学び、フォロワーシップも身に付けられたと感じます。

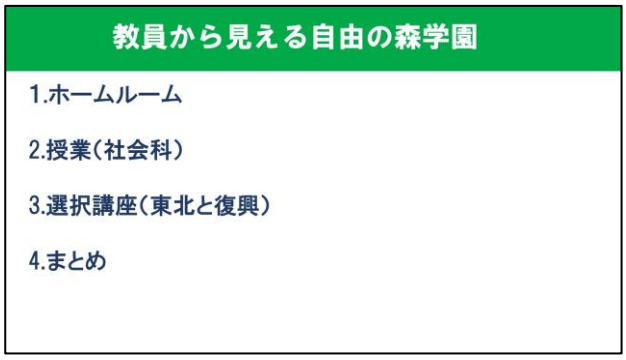
最後に、自分の意見も他人の意見も大切にすることの重要さを知りました。大学生になってもゼミなどで意見交換をすることがあると思いますが、自分からの発信もしっかり行い、他人の声にもちゃんと耳を傾けられる人になりたいです。

東附生としての6年間で私は自分自身がとても成長したと感じました。生徒主体の活動は個人の成長に役立つと思います。大学でもこれらのことを大切に忘れないようにしながら学んでいきたいです。

「自由の森学園における学び」

内田　一樹（自由の森学園中学校・高等学校教諭）
江利　はるり（自由の森学園高等学校在校生）
嶋岡　鼓太郎（自由の森学園高等学校在校生）

（内田）　私は自由の森学園で高校 1 年 7 組の担任をしている社会科教員の内田といいます。私からはホームルームのこと、授業のこと、選択講座のことについて話をします（Slide 1）。



Slide 1

先ほど宇都宮から自森の概要について説明があったと思うのですが、それはどちらかといえば俯瞰的に見た部分で、これから私が話すのは 1 年 7 組というクラスと、私の目から見えている授業というかなりミクロの視点になりますので、その二つを合わせて後ほど質問など頂ければと思います。

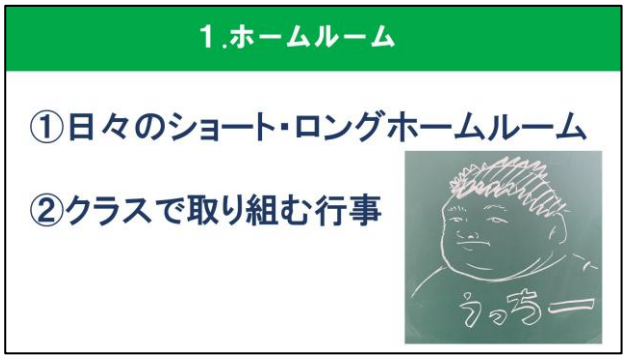
1. 教員から見える自由の森学園

1-1. ホームルームについて

今年度、7 組は 31 人でスタートしました。私は現在担任 2 周目で、初めて担任した生徒たちをこの間卒業させ、今年度新たに高 1 の担任になりました（Slide 2）。

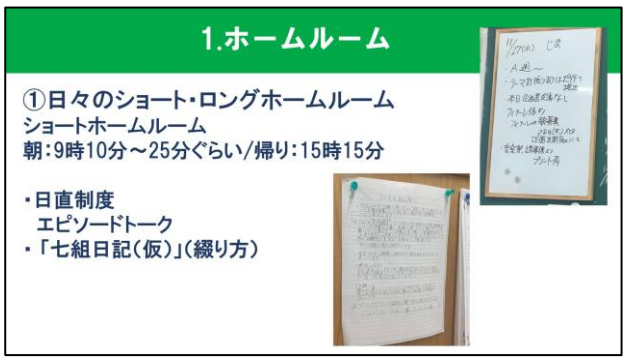
Slide 2

ホームルームで大切にしているものとしては、日々のショートホームルームとロングホームルーム、それからクラスで取り組む行事があると思います（Slide 3）。



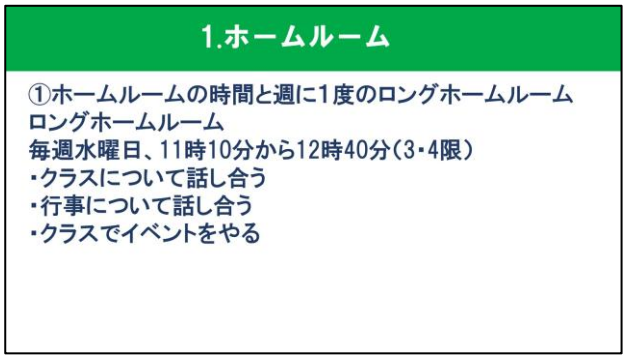
Slide 3

毎日のショートホームルームは、朝は 9 時 10 分から、帰りは 3 時 15 分から始めています（Slide 4）。今年度は学年全体で日直制度を導入していて、各クラスの日直が朝のホームルームをつくります。簡単なエピソードトークというのを設けていて、日直がちょっと話します。加えて、中学で生活綴り方の実践をしていた生徒を中心に、高校に上がってきても生活綴り方をやりたいという声が上がったので、その生徒たちを中心に生活綴り方をホームルームの中で行う時間を設けています。自森は中学 3 クラス、高校 7 クラスということからも分かるように、高校から入ってくる生徒が 6〜7 割を占めるので、お互いのことをもっとよく知りたいということで、「ずっと続く自己紹介」と表現して、「7 組日記（仮）」というタイトルで始まりました。



Slide 4

ロングホームルームは、毎週水曜日の 11 時 10 分から 12 時 40 分までの 3･4 限に行い、クラスや行事について、イベントがあるときにはイベントについて話すことになっています（Slide 5）。



Slide 5

Slide 6 のような感じで子どもたちが司会になって話します。長期休みが明けたときなどは右の写真のように輪になって、思い出などを共有し合っています。

Slide 6

それからクラスの問題も話し合っています。Slide 7 は、昨年末ぐらいに自分たちの授業を改めて振り返ってみようということで話し合いをしていたときの様子ですけれども、授業中にスマホを触っている子や寝る子がいるということが話題に上り、その子たちをどうするかということで議論が始まったのですが、お互いに話し合う中で、スマホを触る子、寝る子が問題なのではなく、クラスの空間をどうやって自分たちで変えていくか、クラスの問題としてこの問題をどう捉えるかという話になっていき、単にスマホをいじっている子に注意したり、寝ている子を起こしたりするのではなく、その子たちがなぜそういう状況になっているのかということをグループに分かれて話し合いました。

Slide 7

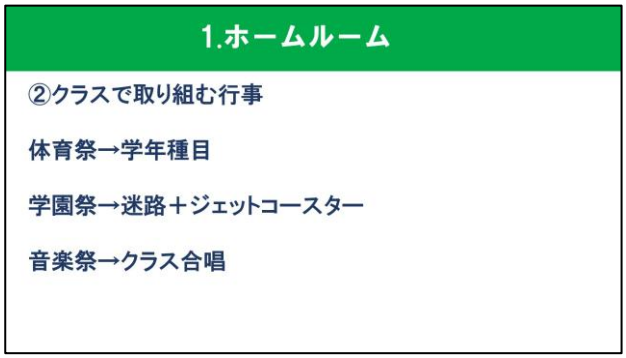
すると、例えば「分からないと言いづらい空間がある」「授業が分からない」「何かリアクションしてほしい」「意見を言いやすい空気をつくってほしい」といった意見が各グループから出され、それらをみんなで共有した結果、机の並べ方を実験的にコの字型にしようということで 12 月末に席替えをしました。先ほどの東附さんのようにお互いの距離は近くないのですが、私のクラスは現在コの字型で授業をしています。

Slide 8 は、夏休み前に流しそうめんをクラスでやったときのイベントで、自分たちで竹を切って行いました。

Slide 8

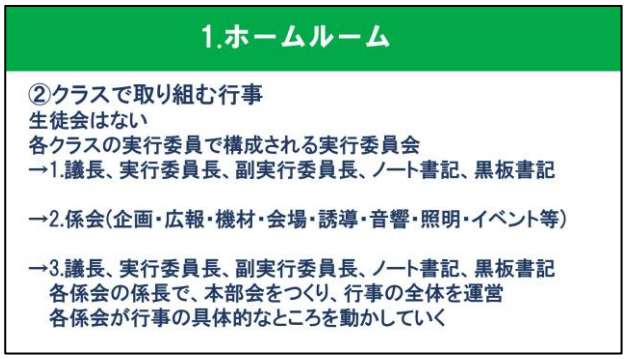
クラスで取り組んできた行事としては、体育祭では学年種目、学園祭では迷路とジェットコースター、

音楽祭ではクラス合唱がありました（Slide 9）。学園祭についてはこの後、責任者だった嶋岡さんから話してもらいますし、行事全体に関わる部分は江利さんから話してもらおうと思います。



Slide 9

自森には生徒会がなく、まず行事をするかどうかを「立ち上げの会」で生徒主体で話し合います（Slide 10）。その後、実際に行事をすることになった場合、各クラスの実行委員で構成される実行委員会で話し合いをし、係会に移っていきます。実際に行事を動かしていくのは実行委員長や実行委員会の議長、あるいはいろいろな係の係長たちで、本部会を生徒で組織し、われわれ教員はそこに伴走していくことになります。



Slide 10

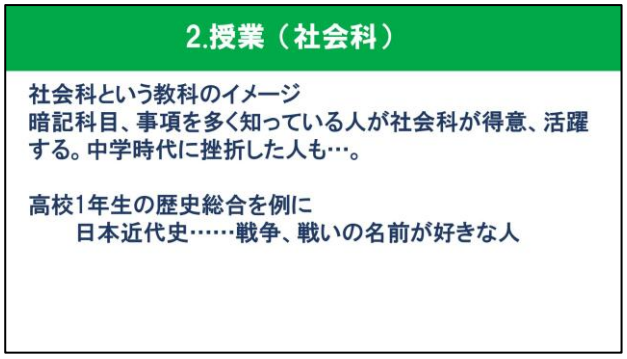
Slide 11 は、われわれのクラスの体育祭のときと学園祭のときの写真です。ジェットコースターもぎりぎり間に合いました。

Slide 11

音楽祭では「そばかす」を歌ったのですが、衣装は青色で合わせようとか、当日は顔にキラキラしたそばかすを入れようとか、自分たちで話し合って演出をし、後ろの照明も自分たちで照明台本まで考えて作りました。

1-2. 授業（社会科）について

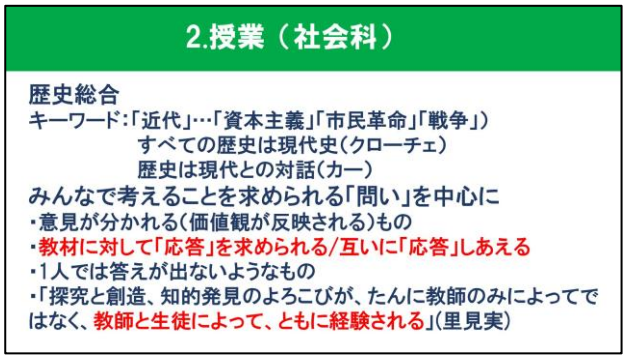
続いて授業についてお話しするのですが、高校に上がってきた子どもたちが持っているイメージはばらばらです。中学から自森に通っている生徒たちは自森の社会科の授業がどんな感じかかなりよく分かっているのですが、高校から自森に来た生徒の中には、事項を多く知っている人が活躍できるのだろうとか、社会科は楽しくない科目だと思っている生徒が多いのです（Slide 12）。例えば高校 1 年では歴史総合を学んでいるのですが、日本の近代史に関しても戦争のことにかなり詳しい生徒がいたり、フランス革命に出てくるいろいろな貴族の名前を言えたりする生徒が一定数います。



Slide 12

しかしわれわれは、暗記ではなく、みんなで考えることを求められる問いを中心に授業を展開しています（Slide 13）。キーワードとして歴史総合であれば

「近代」があると思うのですが、できるだけ意見が分かれるような問いだったり、教材に対する応答が求められる、あるいはその問いに対して互いに応答しなくてはいけないようなものを、問いを作るときに意識しています。ですから、あらかじめ正解があってそこにどうやって自分たちで導いていくかとか、自分の方がより説得力のある意見で他者を言い負かすということではなくて、例えばフランス革命だったらロベスピエールという政治家がいるのですが、彼をどう評価するかという問いを提示します。それは一見正解がないというか、いろいろな人が自分の価値観に基づいて話すので、その中で他者との出会いや発見があります。



Slide 13

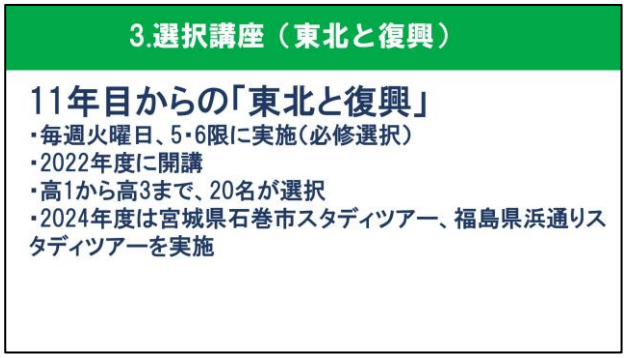
これは先ほどの東附の南澤先生からの報告と重なると思ったのですが、里見実さんが以前、雑誌「ひと」で、「探究と創造、知的発見のよろこびが、たんに教師のみによってではなく、教師と生徒によって、ともに経験される」ことがとても大切だと述べています。私にも答えが分からない問いがたくさんありますし、子どもたちによって答えも毎年変わるので、新しい発見や学びが毎年あるというところを大切にしています。

Slide 14 は、その他の 7 組での授業の様子です。

Slide 14

1-3. 選択講座（東北と復興）について

私は今、「東北と復興」という選択講座を担当しています（Slide 15）。昨年もここでシンポジウムをさせていただき、高大連携ということで東大生を入れた講座をしていたので、そこと重なる報告にはなると思うのですが、現在は高 1 から高 3 までの 20 人が選択していて、毎週火曜日に開いています。2024 年度は石巻のスタディツアーと浜通りスタディツアーを実施しています。



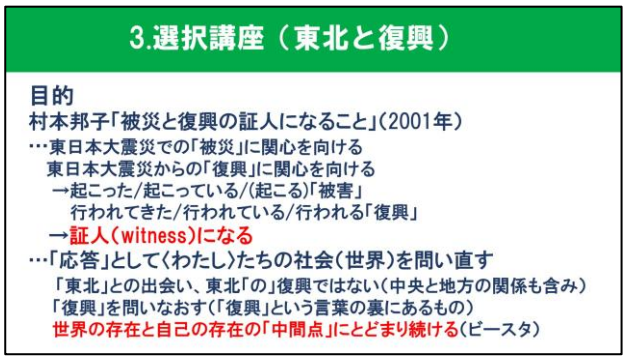
Slide 15

Slide 16 がそのときの写真です。

Slide 16

目的は、被災と復興の証人になることです（Slide 17）。これは村本邦子立命館大学教授の考え方で、私

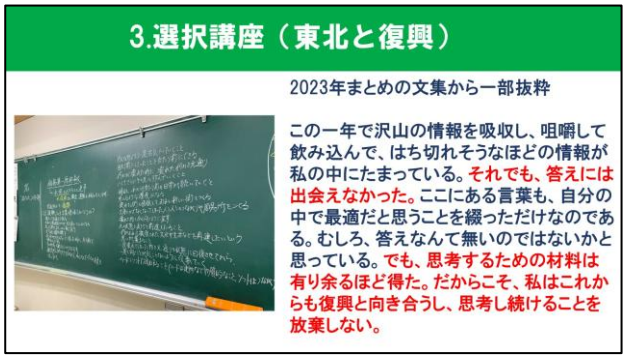
も立命館出身なので大学時代にお世話になっていて、それでこの考え方をとても大切にしています。被災の部分に関心を向けるだけでなく、復興の中で行われていることを問い直すことを大事にしていて、今起きていることに対して私たちが証人（witness）となることを大切にしています。



Slide 17

この講座の名前を「東北の復興」とよく間違えられるのですが、東北の復興が目的ではなく、東北と復興について考えることがこの講座の目的です。ですから、復興を問い直すのですが、やはり私たちにとって、言葉で表現し得ないような事象、受け入れ難い出来事があるわけです。子どもたちに求めているのは、それらを否定するのではなく、「私には何もできない」「私はこの世界の中にはいられない」というのではなく、世界と自己の中間点にとどまり続けることを大切にしてもらっています。これは教育学者のビースタの考えをかなり背景にしています。

具体的に言うと、Slide 18 は去年の文集に掲載された、高 3 のある生徒の言葉です。「この一年で沢山の情報を吸収し、咀嚼して飲み込んで、はち切れそうなほどの情報が私の中にたまっている。それでも、答えには出会えなかった。ここにある言葉も、自分の中で最適だと思うことを綴っただけなのである。むしろ、答えなんて無いのではないかと思っている。でも、思考するための材料は有り余るほど得た。だからこそ、私はこれからも復興と向き合うし、思考し続けることを放棄しない」。つまり、考え続けるということです。



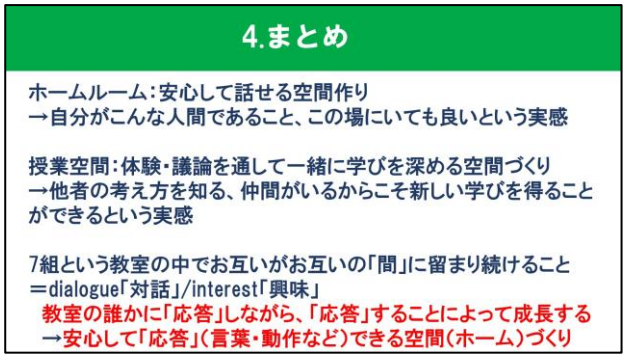
Slide 18

1-4. まとめ

まとめると、ホームルームと授業空間の往還と融合が、学びの土台として非常に重要ではないかと私は思っています（Slide 19）。

Slide 19

ホームルームというのは、安心して話せる空間づくりの場であり、自分がこんな人間であるということ、この場にいてもいいということを実感できる場です（Slide 20）。授業空間というのは、体験や議論を通して一緒に学びを深める空間づくりの場であり、他者の考え方を知り、仲間がいるからこそ新しい学びを得ることができるという実感を得られます。

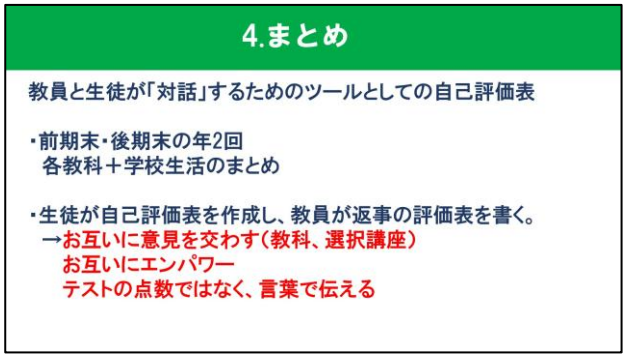


Slide 20

7 組という教室の中で、お互いがお互いの「間」にとどまり続けられることから生まれるのが dialogue

（対話）であり、中から出てくるのが interest（興味）だということです。先ほど綴り方の話をしましたが、いろいろな綴り方が出てくるのをみんなで読み合って感想を言い合ったり、何らかの応答をしたりすることを非常に大切にしています。教室の誰かに応答してもらえたというのも大切なのですが、応答した人そのものも自分が応答することによって成長していくので、安心して応答（言葉や動作など）ができる空間（ホーム）をつくっていくことが大事だと思っています。

では、ここからは生徒に話をしてもらいます。



2. 江利さんの発表

（江利）　私は中学の頃から自森に通っています。私からは、中学からの授業のこと、選択講座のこと、ホームルームのこと、年間行事との向き合い方についてお話ししたいと思います（Slide 21）。

Slide 21

2-1. 授業について

まず、中学での授業への向き合い方の変化についてお話しします。中 1 の頃の私は、日々楽しいことやわくわくすることに夢中で、中でも中 2 のとき、美術の時間に木工作品を作ったりしたことで自分自身と向き合う時間の大切さを学んだことが大きかったです。

そして中 2 のときから中 3 の修学旅行を準備する中で、民泊コース長という役割を自分自身がすることによって、人に言葉を伝えることの難しさや大変さをすごく理解しました（Slide 22）。その中で大きかったのが、中 3 のときにあったレポート発表でした。社会問題に関するレポート発表をしたときに、自分が気付けない発見やレポートを書いている中では分からなかったことがあることに、自分自身が授業を進める立場になることで気付かされました。

Slide 22

その中でもすごくいいなと思った授業の進め方は、コメントシートを書くことでした。自分の中で気付けなかったことをコメントシートにクラスメートが書いてくれたり、まとめてくれたものをもらうのもうれしかったし、それを書く時間もとても充実した学びだったと思っています。

コース長の経験やレポート発表によって、責任感や人に伝えることの難しさを体験しました。この中学での学びが高校での私の授業への向き合い方につながっていきました。

2-2. 選択講座について

選択授業では、より広い視野でいろいろな人たちと関わりながら授業の内容を深めることができました（Slide 23）。私は火曜日にサンバの授業を取って、土曜日にはワールド・ピース・ラボという選択講座を取りました。

Slide 23

Slide 24

火曜日のサンバの授業は、毎年夏にある浅草サンバカーニバルに向けて、高校 1 年から 3 年までの生徒たちが曲や衣装、ダンスの振り付けなどを一からつくることを目的として進めていきました。その中で自分では分からないことが、上の学年と交流することで分かるようになりました。継続することが少し苦手だった自分としては、先輩たちから受ける刺激がすごく大きかったです。

ワールド・ピース・ラボは、世界の平和について学ぶことを目的とし、いろいろな問題や社会で起こっていることについて考える授業でした。答えのないことを考え続けていくことの大切さと、その中でも広島のスタディツアーに行ったことが自分の中ですごく大きな学びだったと思っています。広島スタディツアーの中でも、朝鮮人の慰霊塔を見たことが自分の中ですごく衝撃で印象に残っています。日本人として知らなかった歴史などを学べたことがとても大きかったと思います。

2-3. ホームルームについて

ホームルームでは、高校 1 年生のときに違う学校から入ってくる人たちもいたので、自分が知らないことを経験してきた人たちと一緒にクラスをつくっていく時間はすごく新鮮でした（Slide 24）。みんながより良く過ごせるクラスをつくるために話し合ったり、時にはクラスみんなが楽しめることを考えて実現させていく時間がとても楽しかったです。場を作ることで話しやすいクラスにしていくことが、これからの自分にもつながっていくと思います。

2-4. 行事との関わり

次に、年間行事のことについてお話ししたいと思います（Slide 25）。私は中 1 から高 1 まで、係会や行事活動をしてきました。例えば体育祭では副団長や審判係、学園祭ではイベント係や衛生係、音楽祭では機材係、フィナーレ係などに関わりました。

Slide 25

自森では生徒たちが主体となって年間行事をつくっていて、去年よりもいいものをつくることを考えています。その中で、行事への興味・関心を持てない人たちがどうしたら行事をつくる力になってくれるのか、一人の考えではなくていろいろな意見を拾うための工夫をたくさんしました。その中で、先輩や後輩の関係を越えて一つのものをつくっていく時間がとても楽しかったです。

全体を通して、私は日々楽しいことを見つけることを全力でやってきました。でも、高校に入って特に変わったことの一つとしてあったのが、行事だけでなく苦手なものや嫌いだったものにも「楽しい」を自分の中で見つけることができるようになったことです。授業では、自分では言葉にできないような一面を誰かが言葉にして、それを聞き、また新たな

発見が生まれていくような時間にものすごく意味や学びを感じて、それは今の私の「楽しい」になっています。これからも、学ぶ力となっている「楽しい」をどんどん見つけていきたいと思います。

3. 嶋岡さんの発表

（嶋岡）　自由の森学園高校 1 年の嶋岡鼓太郎です。自分からは、授業、行事、生徒自主活動の 3 点についてお話しします。

僕は元々地元の公立中学校出身で、去年の 4 月に自森に入学しました（Slide 26）。入った理由は、元々絵を描くことやダンスなど表現活動が好きで、自森では教育の一環としてそうした表現活動に力を入れていることに大きな魅力を感じたからです。

Slide 26

それから、中学時代にいわゆるブラック校則のようなものがあって、そういうものを変えようと、自主的に生徒を集めて校則を改訂する活動をしたことがありました。Slide 27 は当時の写真ですけれども、大人も巻き込みながら校則について考える交流会を開いたことが、自森入学への大きな懸け橋になったと思っています。

Slide 27

元々僕の中学校は地元の小さなコミュニティの学校だったので、自森という大きなコミュニティへの環境の変化は自分にとってすごくつらかったのですが、今となってはすごくいい変化だったと思えるようになってきました。今日はその変化についてお話しできたらと思います。

3-1. 授業について

中学のときは中間テストや期末テストがあって、点数稼ぎとしての授業、学びがあったのですが、自森ではテストがないという環境の変化がありました（Slide 28）。何のための授業なのか、何のための学びなのかということを考えて、授業での学びとは何かと考えたときに、自森の授業では、クラスに何か欠けていたら授業が成り立たないし、授業が成り立たなければクラスも成り立たないという、内田先生が先ほど言っていたように両輪になっています。それが日々のグループワークやホームルーム、先ほどの綴り方など、他者との関係での学びになっており、これは自森の授業のかなり大きな特徴だと思っています。

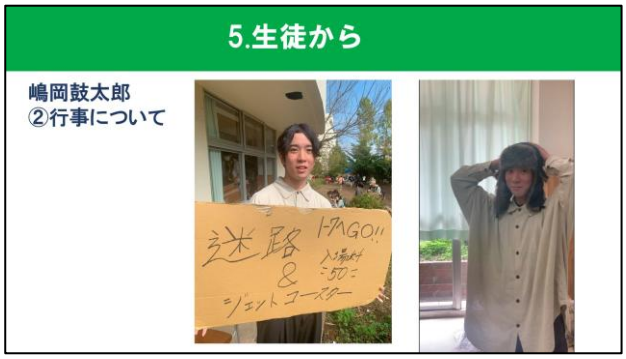
Slide 28

3-2. 行事について

中学のときは本当に小さな学校だったので、体育祭はあったのですが小規模で、そもそも行事は教員に用意された環境に生徒が乗っかるような行事の構造だったので、自森のように生徒が一からつくっていくことがありませんでした。ですので、当時の自分にとっては、行事のあり方がすごく新鮮に映ったのを覚えています。

中でも、この 1 年の行事で一番印象的だったのは

学園祭です（Slide 29）。僕はクラス企画の責任者を務め、迷路とジェットコースターを掛け合わせたアトラクションをやったのですが、責任者として責任を背負うことが自分にとって初めてのことでした。最初はすごく不安だったのですが、手助けしてくれる友達やいろいろな人との関わり、主にクラスとの関わりで、自分の抱いていた不安が解消し、7 組というクラスが安心できる居場所になったと思います。



Slide 29

3-3. 生徒自主活動について

生徒自主活動としては、就学助成拡充のための署名活動や、自森の外へ出て私立の学校との生徒交流会などがあります（Slide 30）。他校で生徒がこのような活動をするときには必ず生徒会などが行うのですが、自森には生徒会がないので、生徒が自主的に集まって活動グループを形成しています。

Slide 30

他校との交流会では、それぞれの学校が抱えている課題、校則であったり、自森であればクラスづくりや就学助成、平和への取り組みについて共有し、他校を知ることで新しい自森を知る機会となっています。さらに外に出ての活動として平和学習が結構盛んに行われているのですが、自分がこの 1 年で最も大きかったのは、高橋哲哉先生が沖縄の現状を軸に話をされた講演会に参加したことでした。

沖縄と聞くと観光地という印象があり、米軍基地をはじめとするいろいろな問題を軽く知っていた程度だったのですが、生徒自主活動では沖縄の現状をあまり知らないのに平和について考え、沖縄と私たち、沖縄と本土を区切って自分が今まで行動していたことに気付き、とてもショックを受けました。そうしたことが社会課題をつくれてしまうし、解決もできるという責任をこの講演会ですごく感じました。

交流会や平和活動の後には一人一人が必ず感想文を書いているのですが、それをグループのメンバー内で話し合う感想交流のようなことをしています。「この子はこんなことを思っていたのか」というふうに、いろいろな言葉を知ることで自分の言葉が変わるので、感想交流が僕はすごく好きです。

この 1 年はいろいろな変化があったのですが、自分にとってとてもいい変化だったと思っています。

（本田）　ご発表ありがとうございました。元々の予定では 15 分ほどの質疑応答を予定していたのですが、すごく充実した内容の発表で時間が全体的に押しております。質疑応答の時間は第Ⅱ部の後半にたっぷり取っておりますので、そちらに譲っていただくということでお許しください。

そして、ウェビナーの方で質問が書き込まれているのですが、ちょっと面白い質問で、東附の生徒さんに「青春できましたか。東附における青春とは何でしたか」というご質問が来ていることと、自森ではお互いを呼び合うときに先生が生徒さんを下の名前で呼んでいて、そういうことにも関係性の特徴があるような気がするという感想を頂いています。このご質問に対しては、後半でお答えいただいてもいいですし、ウェビナーの Q&A に書き込んでお答えすることもできます。

今はそういう質問を頂いていることのみ皆さんにもご紹介して、その対応については保留にさせていただけないかと思います。

第Ⅱ部　主体的・探究的な学びの多様性を探る

コメンテーター：

小玉　重夫（白梅学園大学・短期大学学長、
教授・教育学研究科客員教授）

藤江　康彦（教育学研究科教授）

菅間　正道（自由の森学園高等学校校長）

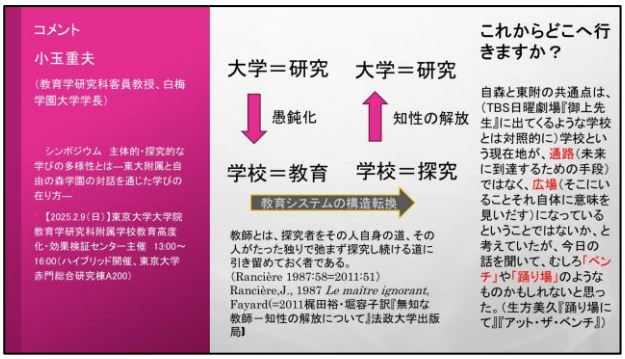
ファシリテーター：

本田　由紀（CASEER センター長・教育学研究科教授）

本田）　第Ⅱ部では、第Ⅰ部で聴いていただいたとおり両校の先生方や生徒さん方から学びのあり方について詳しく発表していただいたことを踏まえ、3人のコメンテーターの方々にそれぞれ感想や印象を短くお話ししていただいた上で、私も加わってディスカッションをしたいと思います。それを踏まえ、今度は会場やウェビナーでご参加の皆さまからの質問にも応答する形で議論していきたいと思います。

ということで、3 人のコメンテーターの 1 人目として、白梅学園大学・短期大学の学長であり、ついこの間まで教育学研究科の教授でもいらした小玉重夫先生にお願いしたいと思います。

（小玉）　2000 年度に総合的な学習の時間が導入されて四半世紀がたとうとしていて、さらにその後、2022 年度に今の高校 3 年生が高校 1 年生になったときから学習指導要領で総合的な探究の時間が入り、新しいフェーズを迎えています。



Slide 1

Slide 1 は、ジャック・ランシェールの枠組みを使って教育システムの構造転換を表したものです。

これは私の考えなのですが、今までは知識の生産を大学が行い、大学で生産された知識が学校に下ろされて、学校でそれを教える枠組みでした。この枠組は今でも基本的には変わっていないのですが、ランシェールはそれを「愚鈍化」の構造と呼んでいます。つまり、知識を有する者が知識を有さない者に対して「説明」をするという「説明体制」のもとでは、生徒の愚鈍化が進行するというのです。

それを転換するためには、学校自体が知識の伝達を行う説明体制から解放されて、知識を生産，探究する場にならなければなりません。これまでのように知識の生産は大学が行い、学校教育はそれを伝達する場であるというあり方を構造転換させ、学校での探究から大学での研究のあり方そのものを変え，イノベーションしていくことが求められます。このように、学問の構造転換を促す場として教育を考えていくことが重要だと思います。そう考えると、東附も自森もまさにそういった構造転換の場として位置付くのではないかと思っています。

TBS の日曜劇場で現在放送されている「御上先生」というドラマでは、エリート校みたいな学校が出てきて、恐らくドラマの中では今後生徒たちが変化していく話になると思うのですが、東附や自森の共通点はそういう学校とは対照的に、未来に到達するための手段として位置付けられるレールの上を走ってきた人たちが小中高大と続いていく通過点としての学校ではなく、むしろそこにいること自体に意味を見いだすような学校になっていることではないかと思うのです。この、そこにいること自体に意味を見いだすという学校の性質は、「広場」という言い方でもいいのですが、むしろ「ベンチ」や「踊り場」みたいなものなのかもしれないと思いました。

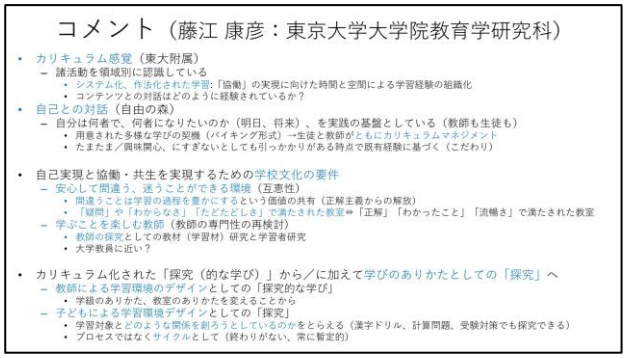
内田さんがビースタの言葉を使って「間」にとどまるという言い方をしていましたけれども、自分がどこからやって来たのかということ、どこに行くのかということは取りあえず置いておいて、今この場にいることがまさに青春なのだという、青春する場

としての学校であり、それが「踊り場」や「ベンチ」なのではないでしょうか。「通路」としての学校から、「踊り場」や「ベンチ」としての学校へ、というイメージですね。

「silent」や「海のはじまり」「いちばんすきな花」といったドラマの脚本で知られる生方美久さんのデビュー作は、高校の階段の踊り場を題材にした「踊り場にて」で、最近映画になった「アット・ザ・ベンチ」というオムニバスの作品にも生方さんの脚本が登場します。それらに触発されて、生方さんに一昨日ここに来ていただき、語る会を開いたのですが、そのときも、「ベンチ」や「踊り場」のような、いったんそこで立ち止まって自分のあり方を考え、そこで出会った人たちと対話し、ものを考える場所というものの意味が話題となりました。まさにそういう場所として、自森も東附も存在しているのだと、あらためて思います。それがランシェールの言っている知性の解放につながり、学校での探究が大学での研究を触発することにつながっていくのではないかと思います。

（本田）　続いて 2 人目のコメンテーターとして、東附で授業をするなど密接に関わりを持っていらっしゃる教育学研究科教授の藤江康彦先生にお願いしたいと思います。

（藤江）　両校の皆さんの発表を聴きながら、私なりに考えたことや触発されたことを申し上げたいと思います（Slide 2）。



Slide 2

そもそも探究の前提として、それぞれの学習者が自分なりのこだわりや興味関心に基づいて対象との関係をつくっていくことがあると思いますし、その点では主体的といえると思います。

東附の発表は、もちろん今日の内容からだけなので全ての生徒がそうではないかもしれないですし、もしかしたら今日発表された内容の主旨はそこではないのかもしれませんが、一つはカリキュラム感覚が非常に優れていると思いました。私自身は非常にぼーっとした高校生だったので、全くカリキュラムのことは考えずに時間割通りに過ごしてきました。お二人がそれぞれの活動を領域別にきちんと整理して認識されているのはすごいと感じました。

例えば、淺川先生がお話しされた中にあったシステム化、作法化された学習については、協働の実現に向けた時間と空間による学習経験の組織化であるといってよいのではないかと思ったのですが、そういう形で学校生活を送っている中で、学習内容やコンテンツとどのように対話しているのかということを伺いたいと思いました。

それから自森の皆さんの話を聴いて思ったのは、自己との対話を徹底できる環境でもあるし、逆にそれができないとちょっと厳しいのかなという感じもしたのです。自分は何者であって、将来何者になりたいのかということを問い続けることが実践の基盤になっているように思いました。それは先生も生徒もそうであり、先生自身も恐らく自分が何者であるかということを常に問いながら仕事をされていると思いますけれども、バイキング形式というか、多様な学びの契機が用意される中で、生徒と教師が共にカリキュラムマネジメントをしているという印象を受けたのです。

どういうものを選んでいくのかということは、もしかしたらたまたまであったり、興味関心に過ぎないのかもしれませんが、そこで何らかの引っ掛かりがあるという時点で既有経験に基づいているのだろうと思うと、そうした既有経験自体がどのような形で今の学びにつながっているのかということもちょっと聞いてみたいと思いました。

両校の発表を聴いた上で私なりに少しまとめてみると、一つには自己実現と協働や共生を実現するための学校文化が両校にはあって、それが主体的・探究的な学びの基盤になっているのではないかと考えました。そう考えたときに何が要件になり得るかというと、一つには互恵性ともいえるのかもしれませんが、安心して迷ったり間違ったりすることができる環境がそこにあるということです。間違うということは学習の過程を豊かにすることなのだという価値が共有され、正解主義から解放されていること、あるいは正解や流暢さで満たされた教室ではなく、疑問や分からなさ、たどたどしさで満たされた教室が校内にきちんと用意されているか、あるいはそういう教室が目指されているかといったことが、恐らくさらに下位の要件になると思いました。

それからもう一つ、もし可能であれば後で伺ってみたいのですが、先生自身が学ぶことを非常に楽しんでいると思うのです。これは南澤先生も内田先生もそうでしたが、教師が探究として学習材研究や学習者研究をされています。そういった点で教師の専門性について探究や主体性を考えたときに、再検討する必要があるのではないかと考えました。こういった先生方の探究のあり方というのは、私は大学教員として自分が研究しながら学生の研究にも付き合っているわけですけれども、学生から学ぶことは非常にたくさんあって、むしろ自分が知らないことを学生が調べてきて、なるほどそういうことがあるのかと自分もわくわくしたりするのですが、それに近いのではないかと思いました。

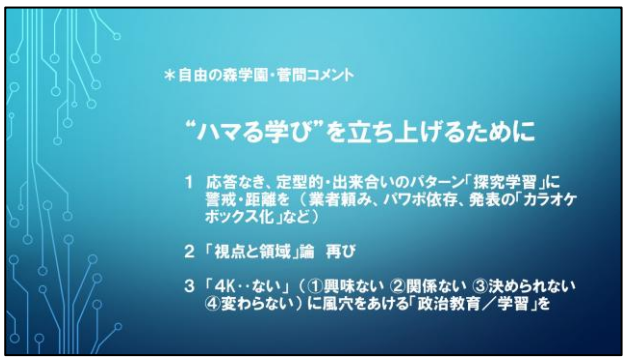
それから、カリキュラム化された探究から、学びのあり方としての探究へという視野の転換や拡張が必要なのではないかと思います。よくいわれている「探究的な学び」というのは、ある意味でカリキュラム化された探究です。つまり、教師が用意してそれを生徒に提供しているわけです。それはそれで非常に重要なことで、教師による学習環境デザインとしての「探究的な学び」といえると思うのですが、それに対して子ども自身が学習環境をデザインして探究していることとは、必ずしも一致しないものとして位置付ける必要があると思います。

つまり、先ほど申し上げたような探究の元々の意味からすると、学習対象とどのような関係をつくろうとしているのか、その関係づくりをしているところを探究と捉えれば、仮にそれが漢字ドリルであっても、計算問題であっても、受験勉強であっても、生徒が探究する局面は必ずあるはずで、それを捉えることが重要なのではないか。それが教師によるカリキュラム化された「探究的な学び」の中でどう起こっているのかを捉えていくことが大事だと思います。

そのときに必要な視点は、探究はプロセスではないということです。つまり、問題解決のようにスタートがあってゴールがあるのではなく、サイクルとして捉えるということです。終わりがなく、常に暫定的な結果は出てくるけれども、それが新たな学びにつながっていくという視点で、子どもの学びを捉えることが大事なのではないかと考えました。

（本田）　それでは3人目のコメンテーターとして、いよいよという感じですが、自森の校長でいらっしゃる菅間先生からお願いしたいと思います。

（菅間）　3点コメントしたいと思います（Slide 3）。タイトルは「ハマる学びを立ち上げるために」としました。「ハマる」としたのは、自由の森の高校生が「今、この課題にハマっている」「今、この授業にハマっている」等というふうに、授業や場とがっちり向き合っている時の楽しい表現として「ハマる」という言い方をするからなのです。そういう学びを立ち上げるために、そして必ずしも自森のことだけでなく後期中等教育全体を視野に入れて、お話ししたいと思います。



Slide 3

一つは、「探究」に関してです。私の見たところ、状況としては、玉石混交というか、面白そうというものもあれば、これで本当に探究になっているのかというのも多々あります。例えば、内田さんの報告に「応答」という言葉が何度も出てきました。私もとても大事なキーワードだと思っていて、割と学園でこの言葉を使うのですが、応答がなかったり、あるいは定型的・出来合いのパターンだったりします。私は企業が探究を請け負うことは一概に悪いとは思いませんけれども、探究学習を請け負う教育産業のホームページに行くといろいろな高校名が出ていて、「うちの学校の探究学習はこの会社と一緒にやっています」という形で紹介されています。これら全てを単純に“教育の市場化・商品化”と言うつもりはありませんが、やはりそこは教師と生徒が自前で立ち上げていくべきなのではないかと思っています。

私はパワーポイント資料を作るのが苦手なのですが、生徒も教師も発表がパワポ依存で、パワポ作成にかける時間があるなら本を読めよ、もっと生徒の顔を見ようよとも思うのです。

関連して言うと、発表が“カラオケボックス化”してはいまいか、ということがあります。発表を誰も聴いていなくて「次の人どうぞ」という感じで、次に発表する人はじめ「次は何を／どう（発表しようか）歌おうか」ということで頭がイッパイになってしまっている。そうではなくて、目の前で発表している人に、問いに応答することが大事で、それは何も正解をきれいに返すことでも、ヨイショの拍手をすることでもない。今、そこで生成的に立ち上がっている学び、この教室でしかできない「協働・共同」探究になっているのかどうか。応答なき探究学習でいいのか。教室が、応答的・協働的な学びの場になっているかどうか、私の勤務している自森も東附も、そして全国の高校も、一つのモノサシとしてあててみるのはどうだろうかというのが 1 点目です。

2 点目は「視点と領域」という話です。先ほどお話しいただいた小玉さんも書いている『総合学習と学校づくり』という本が 20 年ほど前に出ているのですが、この中で竹内常一さんという教育学者が「視点と領域」という話をしています。

自由の森も東大附属も、探究や総合学習の時間が時間割に書いてあるかどうかは問題ではないと私は思っています。今日のこの時間がまさに探究的になっている、この教材、この問いが探究的になっているかどうかという「視点」がとても大事であって、枠組みとして自森では時間割を見ても探究の時間はないのです。ないけれども、選択学習や必修授業で仲間たちとハマっている、探究しているわけです。東大附属は「領域」がしっかり用意されていて、最後の出口のところでは本当に高校生としてすごい量と質の卒業文集を作っていく。それはその学校なりの出口が用意されていていいと思うのですが、“「視点と領域」論再び”と述べたのは、その学校が探究を設けているかどうかが重要ではないということです。むしろ逆に探究の時間だけは探究をして、あとの時間は全く非探究だったら何にもならないのですから、その学校なり、その時間なりのハマる学びをつくることが大事ではないかと思っています。

3 点目、日本の若者はあまり政治に興味関心がない、と言われています。このような状態を私は、「興味がない」、「（自分と）関係がない」、誰に入れていいか「決められない」、どうせ選挙に行っても「変わらない」、の４つの「ない」の頭文字を取って「4K…ない」と呼んでいます。私はこの「４K…ない」をひっくり返して、自分に関係がある、大人でも決められないのだから間違ってもいいというような豊かな試行錯誤を学習の中で行っていくことがとても大事だと思います。これは性急で表層的な政治教育を！

と言っているわけではありません。今日の内田さんのレポートにあった「東北と復興」も、ではどうしていくかという「復興」プロセスに政治的な視点は必ず必要になるわけです。

これだけ若者が政治に背を向けているこの社会にあって、やはり社会科だけの仕事ではなく、探究的な学びの中で政治的なるもの再興・意識化は不可欠です。先ほど小玉さんが「御上先生」の話をしていましたが、この番組のキラーフレーズが「パーソナル・イズ・ポリティカル（個人的なことは政治的なこと）」です。これはフェミニズムでずっといわれてきた「私が困っていることは政治の問題だ」ということであり、この「個人的なこと」と「政治的（社会的）なこと」をコネクトしていく工夫が大人に求められています。そして最後に、教師たちに「探究」をさせる人員的・精神的ゆとりが必要だということも言い添えておきたいと思います。

コメンテーターとのディスカッション

（本田）　先生方それぞれの観点から両校を見ていただいて感想を述べていただいたのですが、小玉先生は「ベンチ」「踊り場」といった言葉やランシェールを引きながら、主に共通点に力点を置かれていたと思います。藤江先生は両校の違いにも目を配られた上で、これからの学びについて考えるべきことを言ってくださったと思います。菅間先生は非常にダイレクトに、自森が目指している事柄の核にあるようなことを言葉で表現してくださったと思います。

さて、どうやってディスカッションしようかと猛然と考えているのですが、私からもう少し確認したいことがあります。小玉先生がおっしゃった「ベンチ」「踊り場」という比喩ですけれども、これは手段としての通路でもなく広場でもないという言い方をされていました。「ベンチ」「踊り場」という比喩が物語っているものについてもう一言ご説明いただけませんか。

（小玉）　今までの学校が通路という形でやってきたのを広場にしていくのだというのは私も同感で、その意味では「ベンチ」にしても「踊り場」にしても、広場の別の形と言えなくもないですが、広場と言ってしまうとそこがゴールのようなイメージになって、みんながそこに集まって一緒にやっていくような感じになると思うのです。

でも、特に高校生が言っていたこと、島貫さんが言う「野放し」とか、石川さんが言う「青春する場所」とか、江利さんが言う「クラスというのは自分一人ではなく、自分もクラスの一人だと思える空間」とか、嶋岡さんが言う「自分にとって安心していられる７組」というのは、どれも居場所であったり青春であったりして、いったんそこで立ち止まって今までの自分をリセットしつつ、将来の自分が必ずしもまだ決まっていない状態なわけです。それこそビースタが言っている「とどまる場所」という意味では、「ベンチ」や「踊り場」という比喩の方がしっくりくると思いますし、東附や自森が大切にしていることとも重なるのではないかと思います。

（本田）　恐らくですが、時間軸を含みながら「そこにいったん」というのが大事だと思います。いったんそこに場を持ちながらも、将来に向かうことだけが重視されているような、まさに通路としての学校教育ではなく、いったんそこに集いながら、たゆたいながら、でも将来に向かっていく視線を自分の中に育んでいくというイメージですかね。

それから藤江先生からは、東附は非常にカリキュラム感覚が強いという話があり、システム化・作法化という言葉もありました。一方、自森は自己との対話という側面が非常に強くてバイキング的であるということで、それぞれの特徴を非常に良く言い当てていらっしゃると思いました。

私自身がご報告を見ながら思っていたのは、東附は「3」に非常に取りつかれているということです。というのも、2･2･2 で 3 分割されていたり、カリキュラムも教科と総合と課外の三つに分けられていたり、三つずつに分けています。かつ、後の学年ほど野放しになっているとおっしゃっていましたが、それは 1〜2 年次の総合学習入門であったり、個別の授業におけるコの字型であったり、グループ別などのいろいろなツールや方法論を導入しているからで、それで最後の方はできるだけ野放しでやっていける形になっているのではないかと思いました。

集大成としての卒業研究が東附の非常に大きな特徴だと思うのですが、もしかしたら自森においては集大成ということはそれほど気にされていないのかもしれません。3 年なり 6 年の最後に何がどこまで到達したかということではなく、一つ一つの学びが記述で評価されているということもあるのですが、常に個別の学びが全て確認されながら進んでいくという違いがあると思います。

つまり、きっちりした三つ編みでできている東附と、ゴージャスでおいしいちらしずしのような自森という印象を私は受けています。かつ自森は、異学

年で接触する機会が多いのではないかという印象を持ちました。そういう違いがあると思います。

これも藤江先生の真意をご確認したいのですが、カリキュラムとしての探究から学びのあり方としての探究へということについて触れられていました。もしかしたら前半で東附の方がカリキュラム感覚が強いとおっしゃっていたことと照らし合わせると、東附に対して反省を呼びかけるような意味合いもあったのでしょうか。

（藤江）　そういう意図は全くなくて、カリキュラム感覚が強いと東附についてコメントしたのは率直な印象です。ただ、学校として探究的な学習環境をつくっていくときに、どの先生がたも取り組めるような仕組みになっているのではないかと思っています。

それと、最後に申し上げたカリキュラム化された探究というのは、行政主導で行われている昨今の「探究的な学び」はどちらかというと生徒が探究するように仕向けるカリキュラムをつくるという意味で、仕組まれた探究というか、カリキュラム化された探究というか、制度化された探究になっているのではないかということです。それをつくることに先生方が躍起になっていて、もちろんそれは大事なことではあるけれども、その中で生徒が探究しなければ意味がないわけで、むしろ生徒側の学びのあり方としての探究を重視しようというニュアンスで申し上げたのです。

（本田）　では、私がちょっと間違えて理解していたようで、行政が進めているものに対するある種の警鐘のような意図でおっしゃっていただいたということがよく分かりました。

菅間先生は、「4K・・ない」とか、視点と領域論再びとか、同じように行政仕込みの探究学習に非常に警鐘を鳴らしていただいたわけですけれども、すごく興味深いのは、政治という言葉が出てきたことです。小玉先生も教育政治学と言っておられたりするわけですけれども、一般的に教育と政治というと、中立性を求められたり、タブーのような印象がある中で、かなり強い思いがおありで政治という言葉を使われたのではないかと想像するのですが、これについても言葉を補っていただけますでしょうか。

（菅間）　縁あって大学で「社会科・公民科教育法」を教えていて、社会科教師を志望している学生に出会うのですが、よく聞く言葉が「とにかく社会科の授業で大事なことは、偏ってはいけないこと」なのです。私は自由の森で内田さんと同じ社会科でずっとやってきて、「偏ってはいけない」というのが最も大事な事柄だとは思っていませんでした。客観とは、中立とは、ということを考えることは、社会科教師としてもちろん大事なことだけれども、それよりも生徒たちが目を輝かせたり、ぐっと身を乗り出すような教材や問いとどう出会わせるか、というところから入ります。でも、社会科教師を志望している人の少なくない部分が、異口同音に「偏ってはいけない」という。逆に言うと、それぐらい政治化されているとも思うのです。生徒も、そして教師も自分の意見を言ってはいけない。「客観・公正・中立」という、それ自身「政治的な」標語のようなものにがんじがらめになってしまっている。でも、応答的な学びをつくろうとして、もし正解が 1 個だったら、どうにも議論や応答が立ち上がる余地がありません。

だから、異なる意見や考え方に触れて、「その見方、考え方は面白いな」と思うからこそ教室に集う意味があるんだっていうことを再興というのか、発見というのか、再創造するというのか、それがどの教科であっても、行事づくりであっても、ホームルームであっても、とても大事になってくる。あなたがそこにいることに意味があって、あなたの発言は大事にされるべきである。同時にそれと同じくらい他者の意見を大事にする…それが政治なのです、と。つまり、政治という既存の言葉の垢を落として、豊かな政治概念を若い人ともう一度立ち上げていかないと、若い人は選挙に行かない、政治に関心がないと

いうぼやきがずっと続いてしまうと思うのです。

（本田）　菅間先生に続けてお願いなのですが、東附からの発表に対して確認しておきたいことやここはどうなっているのだろうと思うことがあればお願いします。

（菅間）　自由の森との比較で一つ考えたいのは、自森には生徒会がありませんが、東大附属には三者協議会という場があり、生徒・教師・保護者が語り合って、緩やかな合意を目指したり、違いを明らかにしたりしています。学校自治のあたりで大きく異なるところがあるので、そういう制度的な協議会の有無が、私の先ほどの言い方で言えば、政治意識や合意をつくっていくうえで、どういう光や影があるのかというのは個人的にとても興味があります。元東大附属の淺川さんとは長い付き合いですけれども、そのことは彼ともずっと話をしているので、個別の学びの豊かさと学校全体の参加や自治の問題にどのような連関があるのかというのはとても興味があります。

（本田）　東附に対して菅間先生からご質問を頂きました。藤江先生からはコンテンツとの対話が東附ではどうなっているのかというご質問があったと思うのですが、その点も含めて、東附や自森に聞いてみたいことがあればご発言いただけますか。

（藤江）　コメントの冒頭でも申し上げたように、探究といったときに、最近は自分事、我が事という言葉もいわれますけれども、自分なりのこだわりや興味関心に基づいて学習対象との関係をつくっていくことが前提になっていると思っています。そう考えたときに、生徒の皆さんそれぞれが、どういう形であれコンテンツであるところの学習内容とどう向き合っているのかということを、探究的な学びの取り組みをされている学校で授業を参観するときには、私自身も興味を持って見ています。

今日はどちらかというと、学校の仕組みといったらいいのか、学級づくり、教科学習、教科外の特別活動という枠の中で両校とも話していただきました。もちろんお話の中では、選択講座にしても、教科学習にしても、総合にしても、具体例を挙げて説明していただきましたので、今日ご登壇いただいた生徒の皆さんの学びについてはよく分かりました。一方で、学校として生徒の皆さんの学習対象との向き合い方をどう捉えて、教師がそこに伴走したり、むしろ生徒から学んだりしているのかというところを、次の段階としては伺いたいと思ったところです。

個別の事例は限られた時間ではなかなか難しいかもしれませんが、例えば自森であれば、最後に文章化されたやりとりの中でそれを把握していくということはありますけれども、生徒が探究している最中にはそれがどうなされているのか、そのあたりを教えていただきたいと思いました。

（本田）　東附だけでなく自森についても、学習対象を我が事にできているかということを先生方はどのように把握しているかということをもう少し伺いたいというご質問だったと思います。

小玉先生からも東附と自森に対して、先ほどのコメントでのキーワードを使っていただいても結構ですけれども、確認してみたいことがあればお願いします。

（小玉）　先ほど視点か領域かという話があったのですが、私はどちらかというと領域派です。探究や総合を東附のように領域として立てた上でやらないと教科が崩れないのです。私は教科を崩したいと思っている派なので。その意味では、自森はどちらかというと教科が崩れていないというか、もっと総合や探究を領域として立てることで教科に揺さぶりをかけるような方向を強めてもいいのではないかと思うのです。菅間さんはどちらかというと折衷派というか、視点もありだよということを言われたいのかなと思いました。

（菅間）　それで言えば私は、視点派ですね。だから小玉さんの説とは対立しています。

（小玉）　そこが恐らく一つの論点で、私は昔から総合学習はカリキュラムの主食にすべきだと言い続けています。25 年前は、理屈としては分かるけれども現実に難しいのではないかとか、水で薄めた「おかゆ教科」だろうという感じで言われてもていたのですが、東附の校長を経験してみて、総合が主食になっている学校があるのだということをすごく実感したのです。今日の二人の話でも、卒業研究ありきで皆さんの青春が回っていました。それは否定的なことも含めてですけれども、そうならないと本当の意味での探究にならないのではないかということが、特に自森に問いかけたいところかなと思います。まだ 1 年生だから、今後 2 年間でまたいろいろ変わると思うけれども、卒業研究でなくてもいいのでそういう場をつくることもありなのではないかと思っています。

（本田）　視点か領域かという興味深い対立が現れつつあって、お二人でもっとがんがんやっていただくのも全然いいのですが、ちょっと迷っています。もう少しだけ議論しましょうか。今ちょうど面白そうな論争になりかけているので。今の小玉さんの発言に対して、菅間さんにもう少し補足をお願いします。

（菅間）　ちょっと手前味噌になってしまうかもしれませんが、自由の森の教師たちは教科教育にいい意味のこだわりを持っていると思うのです。なぜ社会科なのか、なぜ日本語（国語）なのか。それから自分は音楽科の教師だけれども音楽の授業が成り立つのは体育や社会や数学があるからだ、とお互いの教科が言い合えているので、それぞれの専門性を尊重しつつ、お互いの教科を信頼しています。

そして高校段階というのは中学でもなければ大学でもなく、後期中等教育における教科の役割は小さくないと思っていて、視点として総合的な視点や探究的な視点、応答的な視点を含み込んだ教科教育の可能性はまだあるのではないかと思っています。それは決して探究や総合を否定しているものでもなく、相補的な関係でもあるけれども、私が勤務している学校に関して言えば、教科教育の可能性はまだあって、総合がメインディッシュで教科がその周辺というふうにはならないのではないかと思っています。

（本田）　後でもう一度戻ってきて議論してもいいと思うのですが、他にも多数ご質問を頂いていますので、このあたりでいったんコメンテーターからの問いに東附と自森それぞれにお答えいただいた上で、ウェビナーや会場からのご質問にお答えしていこうと思います。

先ほど菅間さんから東附に対して質問していただいたのは、三者協議会などの学校運営のあり方全体と探究学習の関係はどうなっているのかということだったと思います。

（南澤）　私は教員の立場ですが、ここ何年か出ていなくて、むしろ生徒に聞いてみた方がいいと思うので、取りあえず生徒に渡します。

（石川）　三者協議会には中 1 のときに 1 回しか出たことがないのですが、そのときは制服の有無について議論していたと思います。その結果、私が中 2 に上がる段階で制服がなくなったのです。どんな話し合いが行われたか分からないのですが、テーマを決めるのも生徒だったと思うので、制服をなくしたいという生徒会への意見を生徒だけでなく先生・保護者・生徒の 3 者で話し合った後に制服がなくなったことは、三者協議会が東附の学びにつながる面もあると思いました。

（島貫）　三者協議会には 5 年生のときに出たのですが、そのときのテーマが校内でスマホを利用して

もいいかという感じのテーマで、保護者・生徒・教員の3者で議論しました。今の東附は基本的にスマホの使用は駄目ということになっているのですが、その話し合いの中では先生側からも「別にスマホは使ってもいい」という意見が出たり、絶対に駄目という先生もいたりして、思ったより意見が分かれていたという印象があります。保護者からは、最近は連絡手段がだんだんデジタル化してスマホの方が便利だという意見もあったと思います。

自分の意見として伝えたのは、スマホは本当は使ってはいけないのですが、隠れて使っていた人も割といたので、周りの同調圧力というか、自分はできるだけ使わないようにしていたのですが、文化祭などでは使っている人が結構多くて、そういうところでは使うのはいいと思っていました。

それが学びにどうつながるかというと、スマホの利用によって先生からのメールや課題の配信ができるので結構便利になったと思います。連絡手段としてもかなり有効で、例えば学校に行かずにメールで連絡し合ったりするのも簡単になったので、そういう意味ではいい影響があったと思います。

（本田）　制服のことやスマホのことが三者協議会で話し合われていて、恐らくそれは自分で考えたり議論したりするという探究のやり方と地続きなのだろうと私は理解しました。

自森にも質問したいのですが、先ほど藤江先生から、学習対象との向き合い方を教員側からどう把握、評価しているかというご質問がありました。それは文章による評価で十分に把握できているのでしょうか。それから、三者協議会の話題が東附に関して出ましたけれども、同じような仕組みを自森では持っているのでしょうか。

（内田）　何をもって我が事としたと評価するのかという難しさもあると思っています。文字でレポート（評価表）を書いてもらっていて、先ほど言ったように私はかなり応答にこだわっているのですが、それは必ずしも授業で発言することだけ、能動的に何か活動することだけが評価の対象、もしくは我が事にしていることの現れではないのではないかと感じています。

というのも、後ろでかなり静かに考えながら聞いている子やあまり意見を言わなかった子が、評価表の中で他の子たちの意見をかなり引用しながら、私はこう思っていたと書いてくることがあるのです。そういうときにはかなり自分事にできているなと思います。

それから、自己との対話という言葉を藤江さんは使われていたのですが、実際に出てきた言葉に対してどのように応答するのかということの中に自分事であるということが存在すると思っています。「東北と復興」の1年目のときに実際にあった話なのですが、ある女の子のバックボーンには原発反対という思いがすごくあったのです。石巻という町は近くに女川原発があって、何かの交流のときに石巻のおじいさんに「原発に賛成か反対か」という質問を投げかけたのです。すると、そのおじいさんは「賛成です」と言って、原発によって私たちの社会は成り立っているのだと返したのです。彼女はそのとき、立ち止まりました。

その後、私のところに来て、「東北の人はみんな反対だと思っていた。原発賛成と言う人がいるから、いまだになくならないのだ」と言うのですが、だからといって彼女は目の前のおじいさんを否定することもできないわけです。話を聞きに行っているわけですから、その言葉をどうしても引き受けなくてはいけません。

帰ってきてからどういうふうにまとめていくか、あるいは彼女の今後の人生の中で原発との関わりをどうつくっていくかというと、恐らくおじいさんの言葉が彼女の中では引き受けられていて、それを否定せずに、かつ全面的に降伏しないで、その人とどういうふうに対話していこうかということを考えるわけです。ですから、自分事として引き受けている側面があるから対話ができるのではないかというふ

うに私は考えています。

三者協議会に関しては、自森にはありませんが、生徒議会を立ち上げようという動きが今年ありました。東附のように三者協議会という分かりやすい形というよりは､今は萌芽しつつあるという状況です。

（本田）　始まりつつあるということですね。ウェビナーでの質問で、自森の非常に個性的な教育がどれぐらい保護者にも共有されているのかという質問もあって、それにも関わることだと思って伺いました。

東附では我が事、対象との向き合い方をどう把握できているか、状況をお話しいただけますか。

（南澤）　まず、こちらがどれだけ面白いものを用意したつもりでも、生徒に響かないときは響かないということもあると思います。でも、自分が準備できるものは準備していくのが教員だと思います。

先ほどのクルディスタンの授業の話で、最後に授業を閉じるときに、たまたまクラスの中に川口に住んでいる生徒がいて､「知らなかった」と言っていたので､「クルドの人はいないの？」と聞いたら、そもそもどういう人たちなのか、どういう格好をしている人たちなのかという話になったのです。例えば女性の服装は少し特徴的だというような話をして、そういえば駅を降りてすぐの所にケバブの店があるという話になり､割と好き勝手にみんなが話しながら、その生徒の話をみんなが授業空間の中で共有していきます。それによって、同じクラス空間にいる他の生徒も、日本で今起きていることやクルディスタンの人が身近に住んでいることが自分事になるのではないかと思います。

（本田）　もっとそれぞれの質問について深掘りしたいのですが、ウェビナーでも質問が次々寄せられていて、その中で扱っておかなければならないであろう質問を幾つかまとめて取り上げたいと思います。

「地方の公立学校ではどうしても受験のための授業が求められますが、自森や東附では受験対応をどうしていらっしゃるのですか」､「東附や自森のような教育が、入学試験もないような公立中学校で可能になるのでしょうか」､「このような個性的な教育をしている東附や自森において、先生方はそのための準備をする時間をどのように捻出しているのでしょうか」といった質問もありました。つまり、公立で実現できていないことを実現していらっしゃるわけですが、それは東附や自森に固有の条件があるからできることなのでしょうか、それとも公立においてもできることはたくさんあるのでしょうか。

（内田）　公立で働いたことがないので公立の実態がどうなっているのか分からないのですが、私は自森に来る前に別の私立学校で 2 年間働いていたことがあって、そのときに自森の実践を知っていたのです。周りの同僚たちと話していたときに、自森だからできるのだと言う人がかなりいて、すごい実践だとみんな感動したけれども､「うちの学校では無理だよね」という話をすごくしていて、私もまだ若かったので、なぜそんなことを言うのかなと思っていました（出来ると思っていました)。

例えば、こういう実践をするなら話し合いの時間を 1〜2 時間ぐらい頑張れば確保できると思ったのです。菅間さんが当時、ブラックバイトに関する実践をされていて、私も高 3 を持っていたので、そういう時間を普段よりだいぶ詰めて、時間を何とか捻出して授業をしたことがあります。テストがある学校は、テスト範囲まで学習をちゃんと終わらせないといけないというのがあって、間に合わないときにどうやって時間を詰めるか、説明をうまくまとめて話すかというのをテクニックとして持っているのは、むしろ公立学校の先生方ではないかと思っています。

時間のつくり方に関しては、私も書店で教育に関する本を見ていて感じるのですが、教師へのハウツーとして時短をどうするか、作業時間をどう縮めるかという本が本当に余るほど出ているので、そういうのを買って読んでもらえれば時間はつくれるので

はないかと思います。

もう一つは、テストがあることが大きいと思っていて、テストに教員が縛られ過ぎてしまうと、先ほど私は応答責任という言葉を使ったのですが、今度は説明責任の方に教員自身が向かってしまうのではないかと思うのです。つまり、ここまでちゃんと範囲を終えた、受験のためにこの勉強をやったということをある種アリバイ的に説明することに教員が意識を向けてしまって、そうなると子どもたちに対する応答が難しくなってきます。それは時間の問題ではなく気持ちや姿勢の問題ですが、気を付けなくてはいけないと思っています。

自森の生徒ももちろん受験しますが、単に大学受験のことだけでなく、どんな大人になりたいかということを高校生には話しています。そのために大学に行ったり、就職したり、いろいろな道がありますが、大学に行くにしても、なぜ自分がそれを学びたいかとか、どういうことに問題関心を持っていて、それを自分事にできているかということが大学側からもかなり問われる時代になってきたと思っています。ですので、単に点数が取れることだけでなく、きちんと目的意識を持って次の大学・専門学校に進む子たちが多いと思いますし、そうしたキャリア教育を自森はかなり力を入れてやっていると思います。具体的には、生き方としての進路を学ぶためにいろいろな職場の人、プロフェッショナルの人と出会うということを行っています。

（本田）　おっしゃるとおり、いわゆる年内入試と呼ばれるようなAO推薦が非常に増えていることもあって、自森のような教育がAO推薦タイプの入試にとっては最強かもしれないという状態が現実に表れつつあると思います。

東附に対しても同じ質問を投げかけたいのですが、国立の東附だからこそできている事柄があるのか、あるいは受験対策をどう考えているのかということについて簡単にお話しいただけますか。

（南澤）　受験に関しては、それこそ6年生が来ておりますので、二人が感じたことを率直に話してもらいます。

（石川）　私は高校3年生で、受験は推薦で終わらせたのですが、一般受験ももちろん視野に入れています。率直に思ったのは、この学校に身を任せて楽しく学んでいるだけでは正直一般受験は厳しいです。でも私たちは、先生が何も言ってくれないと動けない生徒ではないので、自分で考えてこの段階から塾に入ろうとか、自分でここをちゃんと勉強しようと考えられる人がほとんどだと思うので大丈夫です。

（島貫）　僕も石川さんと同じで、推薦を使って大学はもう決まっているのですが、率直に言って東附の授業だけでは一般受験は難しいと思います。同じ学年の友達は今が受験真っただ中で頑張っているのですが、一般受験をしている人はみんな塾に入って、参考書をたくさん買ってすごく対策している感じです。指定校推薦や総合型、公募推薦に関しては、塾に行かなくても卒業研究などで培った多様な能力を生かせば乗り越えられると思います。

質疑応答

注. 質問者の匿名性を保つため、各質問者に対して質問者 1.2...という番号を付与した

注. チャットでの質問・回答はゴシック体で表記した

（本田）　さすがに会場からの挙手によるご質問を受け付けないで終わるわけにはいきません。ご質問がある方はぜひ挙手をお願いしたいと思います。

（質問者１）　私の学校では、いわゆる探究を企業と一緒に行っていて、この場にいるのが大変恥ずかしい思いです。とはいえ、その中でお伺いしたいと思うのは、複数教科の教員が探究という授業をつくり、そこで取り組まなければいけない状況があります。その中で一番大きな問題は、共通の教科を越えた指導法がない、あるいはそれを感じられないということで、何をゴールとするのか、どう評価するのかといった問題が個人的な関心としてあります。今日ご登壇いただいている先生方や生徒の皆さんは、実際に探究的な学びの中で何をどう評価されているのか、伺いたいと思います。

（本田）　今おっしゃった探究というのは、恐らく東附に近いイメージの探究と思っていいでしょうか。

（質問者１）　そうです。卒業研究のようなものです。自森においては、教科の中で探究的な試みをしているのはすごくよく分かるのですが、その教科で行っていることが他の教科とどのように共通性を持つというか、探究的な学びの共通性を教員同士でどのように担保しているのかということを伺いたいと思います。

（本田）　さまざまな選択授業で学ばれていることが、その授業を越えてどう共有、統合されているかということだと思います。

東附では何をゴールにして、どういうやり方で進めて、どう評価しているのでしょうか。

（南澤）　卒業研究についてお話しすると、そもそも卒業研究で担当する生徒は、自分の専門とは関係ない生徒ですので、自分の教科の専門性でその生徒と関わっているわけではありません。卒研指導日と呼ばれる日に何をしているかというと、この 1 カ月で何をしてきたかを生徒から聞いて、それこそ今日もたくさん話に出てきた応答をしています。例えば指導が私であれば私から質問して、生徒がそれに答えているので、指導するというよりも生徒が次に進んでいくために、それこそ教員が支えながら生徒が学ぶ形を目指しているので、私の専門ではない話を聞くと私の方が学びになりますし、別に教科の専門性は関係なく話ができます。

それから、評価は 1 人で出しているわけではなくて、学校の中である程度共通した、卒研ではこういうことを大切にしているというものがあるので、それを基準のようにして出す形になると思います。生徒側がそれをどのように認識するかというと、卒業研究で良かった作品は図書室で生徒が自由に閲覧できる環境にあります。先輩たちの優れた作品を生徒が日常の中で見られる状態があって、そうして生徒の中にも一つの文化として育まれますし、われわれもそれをまたイメージするという形になると思います。

（本田）　私が理解している範囲では、卒研を目の前にすると「はんこ回り」があるのです。生徒が卒研の計画を書くと、3 人の先生から OK のはんこをもらうために走り回るのです。3 人の先生に OK をもらったら、1 人の先生が 3 人の生徒を担当する形でそれぞれの進捗を見守るというのが東附のやり方です。

いろいろな方法論が使われていて、もちろん文献の研究は大体の卒研では行われていますが、それを踏まえてアンケート調査をしたり、インタビューをしたり、あるいは自分で実験したりという特定の方法論を使いながら、成果物を作ったり、結論にたどり着いたりという大体のパターンは、これまでの約

50 年間の積み重ねの中で共有されています。先生方の中にも、生徒さん方の中にも、過去の先輩の研究などを見ながらモデルのようなものが出来上がっているのでできている体制ではないかと思います。

（内田）　この後､生徒にも振ろうと思うのですが、先ほどの総合カリキュラムを主食にするかどうかという話で食べ物の例が出ていました。私のイメージでは、東附はあらかじめ大きい定食を作ることが決まっていて、例えばステーキ定食を作るために肉をどう焼くか、米をどうするか、味噌汁をどうするかというのがレシピとしてあって、それがある種の教科学習となって、最後にステーキ定食ができるというイメージでとらえました。一方、自森はバイキングなのですが、バイキングでも何かしらの定食を自分で作れると思います。作り方の上手下手はあるかもしれませんが、バイキングでも最後に自分の手元に来たときには何かしらの定食みたいなものができていると思うのです。

総合学習に関しては、私は去年高 3 を持っていたので高 3 の子たちの評価表を読んでいると、やはり他の学習の学びとつなげて、個人の中で総合することができている子たちがかなりいると思っています。だから、それぞれ個人の中で総合する学習です。これも先ほどの話と同じで、どうやって評価するのかというのは当然あるのですが、彼らが自然と総合することができているのではないかと思います。その形が一つのバインダーである評価表なのだと思います。

高 1 の前期を終えて、私が言ったことに対して何か実際に感じることがあればお願いします。各教科の学びがバインダーで一つになっているのを見たときに、何か感じていることや、学びがこういうふうに深まったということがあれば教えてほしいです。

（嶋岡）　自分は今年、高校 1 年生から自森に入って、評価表という評価の仕方も初めてだったのですが、率直に言うと評価表は自分の思ったことを言葉に残すことが結構大きな意味を持っていると思っています。それを残すことによって、時間が流れていって分からないと思ったときに、過去の自分の考えを見返すことができるきっかけになっていると思います。

（江利）　自分の成長を見返せるものとして評価表があると思っていて、その点では一つの科目の教員からの言葉によって、こういうふうに教員からは見えていたのだなということから学ぶこともありました。ですので、文章同士で話す空間にすごく意味があるのではないかと私は思っています。見返せるというのもそうですし、自分のバインダーとして後から過去を振り返れることは、今の自分の評価表を書くときにもつながっていると思っています。それはこの後もずっと続くことであり、高校 3 年生になったときに、考える一つの武器として今までの積み重ねが見られるのは大切なことだと思いました。

（本田）　言葉による応答がバインダーという物理的に目に見えるものでぎゅっとまとまっていて、それを全部読むことによって、個別の授業を越えた統合が生徒個々人の中で発生しているということなのかなと思いました。

（質問者２）　私は石川さんが話していた生徒主体であることのデメリットについてもう少しお聞きします。面倒臭いとか丸投げされていると感じている生徒がいることで、グループ内にやる気がない人が一人でもいると士気が下がり、良い議論ができないということは社会に出ても結構あると思っています。共通の目的に向かって前向きに進んでいける場づくりはどうしたらできるのでしょうか。教員が一方的に話す授業スタイルであれば、教員と生徒が「1 対 1」という感覚になるのですが、協働的な学びでは「1 対みんな」になるので、どうしても場づくりを考えなくてはいけないと思うのです。場をつくる上で意識していることがあればお聞かせください。

（江利）　それこそ行事やクラスをつくる中でやる気が出ない人は出てきます。そういうときは困るし、どうしたらこの人が参加できるようになるかという問いを投げかけて、例えば呼びかけをしたり、朝回りをしたり、新しいやり方でみんなで巻き込んでいくように心掛けています。

（石川）　生徒主体の活動をするときに面倒臭いと感じる生徒がいる中で、場をつくる上で意識していることは、まず面倒臭いと感じてしまうのは、自分としては仕方がないことだと思っていて、会社に入ったらまた違うのかもしれませんが、授業では根本的に「今やっている歴史は興味がないんだけど」という人も中にはいると思います。

その中でも同じグループにいたら活動しなくてはいけませんし、東附に入学した以上、グループワークをしなければいけないと思うので、例えば英語の授業で、最終的にクラスのみんなの前で発表するというゴールがあったとして、その解決法が合っているかどうか分かりませんが、やる気のある人がどんどん意見を出していき、その場を白熱させていったら、もしかするとやる気がなかった人も自分の考えを持つようになるかもしれません。

そうやって活動していく中で、例えば「今からみんなで話し合うから、あなたは書記をやってね」というふうに何か役割を与えてあげることが大切だと思います。でも、その人のためになっているかどうか分かりませんし、それで士気が上がっているかどうかも分からないので、何が正しいのかは難しいと思います。ですから、これは生徒主体の活動の今後の課題だと自分は思っています。

（本田）　本当に正面から苦しんでこられた方ならではの答えだったと思います。完全に一つの正解があるわけではありませんが、そんなやり方もあるというお答えでした。

質問者３：自由の森学園では教員が生徒を下の名前で呼ぶのが一般的なのでしょうか。それともクラスごとの差異なのでしょうか。教員生徒間の呼び方がクラス・学校文化にかなり強く影響するように思うのでお聞きしたいです。

内田：質問ありがとうございます。教員から生徒へは下の名前で呼びます。それは家の名前ではなく、という文脈からだったと思います。自由の森学園は学園設立の経緯から明星学園が深くかかわっており、そのため対象自由教育の学校文化や考えを受け継いでいる部分も大きいと思います。生徒から教員へはニックネームや苗字にさん付け、教員も呼んでほしい名前で呼んでもらっています。時間の経過とともに変わることもあります。内田はうっちーと呼ばれていますが、一部生徒は内田と呼び、かつては内田樹（内田一樹なので）をもじって、たつるくんと呼んでくる生徒もいました（笑）

質問者４：トウフやジモリにおいて、学校が子供を信頼して、自治を任せ、協同をさせる教育を行っている様子がよく分かりました。これらの教育環境だと、不登校やいじめ問題は起こっていますか?一般と比べて少ない可能性があるのか、そして起こった場合にはこの学校方針の中だと一般と違った対応や結果になるのかをお聞きしたいです。

淺川：不登校の要因は様々ですので、両校ともにゼロということはありません。学校の日常のルールだらけの窮屈さや、常に他者との比較や評価にさらされる息苦しさというのは、一般的な学校に比べて少ないと思います。そうした背景での不登校はほとんどないと感じています。

いじめについても、単一の価値観で収斂するような求心力の高い学級経営とは縁遠いので、そこから溢れそうな存在・異質な他者に攻撃が向くようないじめもほとんど見聞きしません。もちろん発展途上の 10 代の若者たちが集団で過ごしていますので、マイナートラブルは日常にありますし、両校とも SNS がらみのトラブルは昨今増えてきており、その対応には追われています。

自由の森では日常的に、担任が生徒と語り合う時間

（面談ではなく）が大切にされていて、「生活指導」以前に少人数での話し合いで解決していくことが多いということです。

質問者 5 ：大変興味深いお話ありがとうございました。自由の森学園に子どもが通っており、探求的な学習が子どもにとって、大変有意義で、本来の学びのあり方だと感じています。子どもたちが授業を作るためには、子どもたちの関心を集められるような教材の提供の仕方が必要だし、どんな意見も受け止めていく先生の力量が求められるようにも思います。両校では、先生たちの育成にどんなことを大切にされてますか？

淺川：自由の森では創立以来、毎週の教科会が教材研究の時間として大切にされてきた歴史があり、各教員の課題意識や持ち教材が教科の教員全体に共有されながら実践されてきました。近年の多忙化は自由の森でも例外ではなく、その時間が十分確保できずに新たに参加した教員に過去の成果がなかなか共有されていかない悩みもあるそうです。

東大附属では 2005 年の「協働的な学び」を意図的に導入して以来、教科の枠を超えた授業研究・学年会を中心として生徒の固有名詞で語り合う学び・学部の先生方に全面協力いただいた定期的な授業検討会などを通して、みんなで授業作りをしていくようになっています。

質問者 6 ：教員の余白、学び合いの時間はどのように捻出しているのか?事例があればご教示お願いいたします。

淺川：いま勤務している私学では持ちコマが教科だけで 18 時間、その他に総合や LHR や道徳をもつので 20 時間越えが普通です。自由の森も東大附属も、全部合わせて 16～17 時間に抑えています。教科会や学年会も時間割に組んで、放課後の会議をなるべく減らす努力も続けています。

質問者 7 ：トウフさんやジモリさんでは生徒が自主的に学びに取り組む姿が見られていることが、とても興味深く面白いと感じました。現在、日本の若者は将来への漠然とした不安感を抱えている印象があります。先に書いたことでトウフさんやジモリさんの生徒さんには、そのような生徒が少ないのかな？と一考したのですが、その辺の印象について感覚論でも構わないので、お聞きしたいです。

淺川：自由の森については「自分の好きなこと、やりたいことを我慢したり諦めて『将来』に備える必要はなく、続けていいんだ」という空気があり、またそうして過ごした卒業生たちの豊かな「いま」がかなり広範に共有されているので、不安はもちろんあると思いますが、やりたいことがある生徒にとってはまずその目の前にあることを追求するのに夢中なのかなと思います。

東大附属の場合は、6 年間の学びを通して「この先（ほとんどは進学後に）さらに学びたいこと」が明確になっている場合がほとんどで、何度か高 3 の担任もしましたが進路指導について苦労した覚えはありません。いま生徒も答えてくれていますが、予備校などでの受験準備も含めて生徒が自分で進路を拓いていく文化です。

閉会の挨拶

本田　由紀（CASEER センター長・教育学研究科教授）

私ども CASEER と自森とのコラボレーションはまだ始まったばかりです。これから続いていき、かついろいろな形で、できる範囲でいろいろなデータを取りながら、それぞれの良いところ、あるいは気質や雰囲気の違いを把握していきたいと思っておりますし、できればそれ以外の学校との対比もこれから課題になってくると思います。やればやるほどやることが増えてくるわけですけれども、そういう形でこれからも頑張っていきますので、どうか皆さんも見守っていただければと思います。

日本の教育や社会にとってこういうタイプの教育が不可欠というか、ぜひとも必要とされているということは私自身も確信しておりますし、実際には実施が難しいという声もありましたけれども、それを広げていくための取り組みを進めていきたいと思います。

今日は、ご参加ありがとうございました。いろいろ至らないこともあったかもしれませんが、ご協力に心から感謝いたします。コメンテーターの皆さま、東附と自森の皆さまに感謝申し上げて、今日のシンポジウムを終わりとさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

シンポジウム

主体的・探究的な学びの多様性とは

―東大附属と自由の森学園の対話を通じた学びの在り方―

報告書

発　行　者：東京大学大学院教育学研究科附属　学校教育高度化・効果検証センター

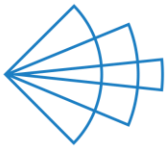
（編集担当：本田由紀、上野雄己、柴山笑凜）

発行者連絡先：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院教育学研究科赤門総合研究棟A212

c-kouka@p.u-tokyo.ac.jp

発　行　日：2025 年 3 月 31 日



CASEER

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター